

磐越自動車道関係発掘調査報告書

なな ほり みち した
七 堀 道 下 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

なな ほり みち した
七 堀 道 下 遺 跡

1996

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

磐越自動車道は、福島県いわき市と当県新潟市とを結ぶ高速自動車道で、現在完成に向けて着々と工事が進められています。全線が開通すると、太平洋側と日本海側が結ばれるとともに常磐・東北・北陸自動車道とも連結され、それぞれの地域の発展に多大な役割を果たすものと期待されております。

新潟県教育委員会は、昭和59年以来磐越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。本書はこの道路の上川パーキングエリアの建設に伴って実施した「七堀道下遺跡」の発掘調査報告書です。

七堀道下遺跡は、縄文時代中期と後期を主体とする遺跡で、出土遺物には関東・北陸方面の土器が認められ、この地域における文化交流のあり方を考えるときの一資料となるものと思われます。

今回の調査成果が、考古学研究に寄与するとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、本調査に多大なご協力とご援助を賜りました上川村・三川村教育委員会並びに調査に参加された地元の方々をはじめ、日本道路公団新潟建設局・同津川工事事務所に対して厚くお礼申し上げます。

平成8年3月

新潟県教育委員会

教育長 平野清明

例　　言

- 1 本書は新潟県東蒲原郡上川村大字九島字七瀬道下322他に所在する七瀬道下遺跡の発掘調査報告である。発掘調査は、磐越自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会が日本道路公団から受託して実施したものである。
- 2 発掘調査は、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託し、平成6年度・平成7年度に実施した。
- 3 整理作業および報告書作成にかかる作業は、平成6年度・平成7年度に実施し、埋文事業団調査課がこれにあたった。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料は、すべて県教委が保管している。遺物の註記は、略記号を「七ホリ」あるいは「ナナホリ」とした。また、註記には遺跡の名称とともに出土地点や層位を併記した。
- 5 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。掲載した図面のうち、既製の地形図等を使用したものについては、原図の作成者、作成年を示した。
- 6 遺物番号は、土器・土製品・鉢貨と石器に分けて、それぞれを通し番号とした。図面図版と写真図版の番号は一致している。
- 7 遺構実測図及び本文で用いた土層註記は、ローマ数字で遺跡内の基本層序を、アラビア数字で遺構内の覆土を表している。
- 8 土製品の磨痕、石器の使用痕、節理面は、スクリーントーンを使って表現した。そのスクリーントーンの示す内容は、図版凡例に付した。
- 9 文中の註は、すべて脚註とした。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 本書の執筆・編集は、飯坂盛泰（埋文事業団文化財調査員）が担当した。また、第Ⅳ章は古環境研究所に委託した。
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を賜った。記して厚くお礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

遠藤 佐　　塚本師也　　横山勝栄　　上川村教育委員会　三川村教育委員会

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の概要

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の体制	2
3. 一次調査	3
4. 二次調査	3
A. 調査方法	3
B. 調査経過	4
5. 整理作業	5
A. 方 法	5
B. 整理経過	6

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7

第Ⅲ章 遺 跡

1. 層序	10
2. 遺構	11
A. 土坑・ピット	11
B. 焼土	13
C. 集石	13
3. 出土遺物	14
A. 土器	14
1) 観察表の記載	14
2) 繩文土器	15
3) 須恵器	19
B. 土製品	19
C. 石器	19
1) 観察表の記載	19
2) 器種別説明	20
D. 銭貨	23

第Ⅳ章 自然科学の分析

1. 七塙道下遺跡の地質とテフラ	29
2. 七塙道下遺跡の植物珪酸体分析	32

第Ⅴ章 まとめ	36
---------	----

要 約	38
引用・参考文献	39

図版目次

図面目次

- 図版1 七塙道下遺跡範囲図
- 図版2 七塙道下遺跡上層遺構全体図
- 図版3 土坑実測図1
- 図版4 土坑実測図2
- 図版5 土坑・ピット・焼土実測図
- 図版6 集石・土器出土状況実測図
- 図版7 土器実測図1
- 図版8 土器実測図2
- 図版9 土器実測図3
- 図版10 土器実測図4
- 図版11 土器実測図5
- 図版12 土器・土製品・錢貨実測図
- 図版13 石器実測図1
- 図版14 石器実測図2
- 図版15 石器実測図3
- 図版16 石器実測図4

写真図版

- 図版17 1.調査前全景 2.遺跡全景 3.遺跡全景
- 図版18 4.12~14列上層完掘 5.12~14列下層完掘 6.平成7年度調査区
- 図版19 7.12列土層断面 8.SK1断面 9.SK1完掘 10.SK2完掘 11.SK2断面 12.SK3完掘
13.SK3断面
- 図版20 14.SK4完掘 15.SK4断面 16.SK5完掘 17.SK5断面 18.SK6完掘 19.SK6断面 20.
SK7完掘 21.SK7断面 22.SK8完掘 23.SK8断面
- 図版21 24.SK9完掘 25.SK9断面 26.SK10完掘 27.SK10断面 28.SK11完掘 29.SK11断面 30.
SK14完掘 31.SK14断面 32.SK15完掘 33.SK15断面
- 図版22 34.SK16完掘 35.SK16断面 36.SK17完掘 37.SK17断面 38.SK18完掘 39.SK18断面 40.
1号ピット完掘 41.1号ピット断面 42.2号ピット完掘 43.2号ピット断面
- 図版23 44.3号ピット完掘 45.3号ピット断面 46.焼土 47.焼土断面 48.1号集石 49.4号集石
- 図版24 50.4号集石断面 51.2号集石 52.3号集石
- 図版25 53.No.1土器出土状況 54.No.120土器出土状況 55.下層テストピット全景
- 図版26 土器1
- 図版27 土器2
- 図版28 土器3
- 図版29 土器4・土製品・須恵器・錢貨
- 図版30 石器1
- 図版31 石器2
- 図版32 石器3
- 図版33 石器4
- 図版34 自然科学分析 植物珪酸体

挿 図 目 次

第1図 着越自動車道路線図	1
第2図 七堀道下遺跡一次調査範囲	3
第3図 七堀道下遺跡グリッド設定図	4
第4図 下層調査範囲図	5
第5図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	9
第6図 七堀道下遺跡土層柱状図	10
第7図 土器時期別出土分布図	16
第8図 剥片・石核グリッド別出土分布図	21
第9図 不定形石器グリッド出土分布図	21
第10図 I 10杭の土層柱状図	30
第11図 E 11杭の土層柱状図	30
第12図 G 14杭遺物集中区の土層柱状図	30
第13図 I 10杭の植物珪酸体分析結果	34
第14図 E 11杭の植物珪酸体分析結果	34
第15図 G 14杭の植物珪酸体分析結果	34

表 目 次

第1表 調査と整理の経過	6
第2表 周辺の遺跡一覧	8
第3表 土坑・焼土観察表	13
第4表 上層石器種別出土数	20
第5表 上層剥片石材別出土数	20
第6表 下層石器種別出土数	22
第7表 下層石器石材別出土数	22
第8表 上層不定形石器石材別出土数	22
第9表 土器観察表	23
第10表 石器観察表	27
第11表 銀貨観察表	28
第12表 七堀道下遺跡I-10杭におけるテフラ検出分析結果	31
第13表 七堀道下遺跡I-10杭の屈折率測定結果	31
第14表 植物珪酸体分析結果	33

第Ⅰ章 発掘調査の概要

1 調査に至る経緯

磐越自動車道は、福島県いわき市と新潟県新潟市を結ぶ高速道路である。路線は、太平洋側のいわき市で常磐自動車道から分岐して、郡山市で東北自動車道と連結・交差する。そしてさらに、奥羽山脈を横断して会津盆地を経由し、阿賀野川沿いに越後平野に入り、新潟市で北陸自動車道と直結する。総延長距離は212kmである（第1図）。太平洋側と日本海側を結ぶこの道路は、沿線地域の産業・経済・文化の発展と交流を促進させる重要な役割を担っている。

基本計画

磐越自動車道のうち、七塙道下遺跡にかかる区間（会津坂下～津川間）は、昭和53年12月に基本計画が策定され、昭和61年1月に整備計画が決定された。この後、昭和63年1月に会津坂下～津川間（約33.2km）の工事施行命令が建設大臣から出され、同年3月に路線が発表された。

県教委は、道路公団から依頼を受けた福島県境～津川間（約13.8km）の法線内全域における埋蔵文化財の分布調査を平成元年11月に実施した。その結果、周知の遺跡2か所（大舟遺跡、北野遺跡）、新発見の遺跡1か所（向新田）、遺跡推定地10か所の計13か所の一次調査の必要性と各地点の遺跡分布面積が報告された。この中に、No49地点（七塙道下遺跡）も含まれた。

一次調査

No49地点の一次調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が平成4年7月と同年11月に実施した。調査の結果、縄文時代の遺構や遺物が検出され、二次調査が必要であることが判明した。県教委はこのことを道路公団に通知すると共に、この遺跡の名称を七塙道下遺跡と改め文化庁に遺跡の発見通知を行った。

二次調査

道路公団と県教委は、調査工程についての協議を重ね、平成6年度に第二次調査を実施することを決定した。二次調査の調査範囲は上川バーティングエリア予定地内で、対象面積は7,300m²である。このうち、100m²については遺跡内の支障物件（墓地）のため平成7年度に調査を実施している。なお、発掘調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が当たった。



第1図 磐越自動車道路線図

2 調査の体制

発掘調査は下記の体制で行った。

[一次調査]

調査期間 平成4年7月21日～7月29日、平成4年11月9日～11月11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 藤田 守彦（総務課主事）

指 導 戸根与八郎（調査課調査第一係長）

担 当 北村 亮（〃主任）

職 員 阿部 雄生（〃専門員）

[二次調査]

調査期間 平成6年4月12日～10月26日

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂田井信彦（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻 正信（調査課調査第一係長）

担 当 飯坂 盛泰（〃文化財調査員）

職 員 大川原英智（〃主任調査員）

沢田 敦（〃文化財調査員）

調査期間 平成7年10月30日～11月10日

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 藍原 直木（事務局長）

山上 利雄（総務課長）

龜井 功（調査課長）

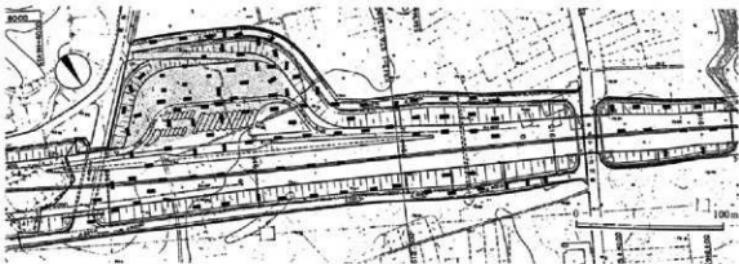
庶 務 泉田 誠（総務課主事）

指 導 藤巻 正信（調査課調査第一係長）

担 当 飯坂 盛泰（〃文化財調査員）

3 一次調査

対象面積は36,300m²で、平成4年7月21日～7月29日と平成4年11月9日～11月11日の2回に分けて調査が行われた。調査方法は、2×5mのトレンチを任意の位置に計118基設定し、遺構・遺物の有無を確認した(第2図)。掘削方法はバッグホーを中心に行い、遺構・遺物の精査を必要に応じて人力で行った。この調査で3基のトレンチから土坑と思われる遺構が検出され、15基のトレンチから縄文土器片、石器などが出土した。ここでは、洪水堆積による沼沢火山灰層(基本層序のIV層)を間層に二枚の黒色土層(基本層序のIIとV層)が堆積している。この一次調査では、II層を中心にI層～III層(上層)までの範囲で遺物が出土し、沼沢火山灰層下のV～VI層(下層)からは遺構・遺物は確認されなかった。その結果、遺構・遺物が確認された調査対象範囲の南東側、約7,300m²について二次調査を行うこととした。



4 二次調査

発掘調査は、平成6年4月12日～10月26日と平成7年10月30日～11月10日に実施した。調査は、平成6年度中にすべて完了する予定であったが、調査対象地に存在する墓地の移転が遅れたため、この部分の調査は平成7年度に実施した。

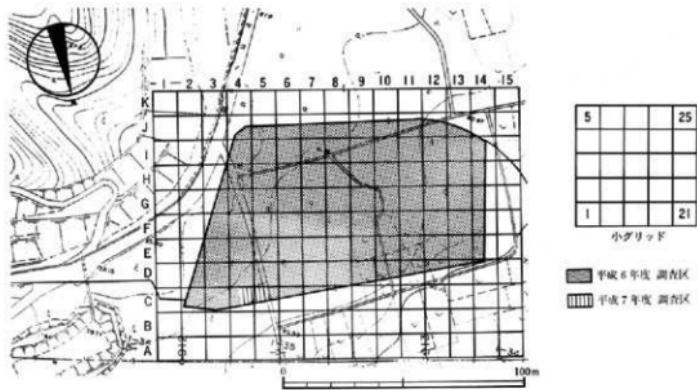
A 調査方法

1) グリッド設定

大グリッドは、磐越自動車道のセンター杭No412、No414の2点を結んだ線を基準に10m方眼で調査対象地に設定した(第2図)。大グリッドの軸は、磁北から53度西偏する。グリッドの呼称は、法線に平行する方向の南東側から北西へは算用数字の1～15、法線に直交する北東側から南西へはアルファベットのA～Kとし、両者の組み合わせによって、「A 1」・「B 2」のように表示した(国土地標は、E 3 東X=183204.606 Y=86342.892 E 14 東X=183270.039 Y=86254.470)。大グリッド内における小グリッドは2m方眼とし、1～25の番号を付した。前述の大グリッドと組み合わせると「A 1-1」・「D 3-25」というように表され、遺構と遺物の位置の表記はこの方法で処理した。

2) 調査方法

調査方法は基本的に、表土除去、基本層序の確認、包含層発掘、遺構検出・発掘、写真・実測の行程を行った。



第3図 七堀道下遺跡グリッド設定図

純粹な遺物包含層に達するまで15~20cmの深さがあるので、表土の除去は重機を導入し、遺構の有無・遺物の出土を確認しながら遺物包含層上面まで徐々に掘り下げた。基本層序の確認は、土層のあり方を把握する目的で行った。調査区に土層観察用のベルトを東西方向に1条、南北方向に40mの間隔をあけて2条のベルトを設定した後、ベルトに沿って幅1mのトレンチを入れて人力で発掘した。この方法により包含層、地山の状況を把握した。包含層発掘は、人力で掘削し、堆土はベルト・コンベアで調査区外に集めた。出土遺物は、土器の一括出土例や同じ母岩の石器剝片類は一部で原位置を記録したが、多くの出土遺物は層位を確認しながら小グリッド単位で採取した。包含層発掘の後、遺構精査を行った。検出された遺構は、番号を付し発掘した。遺構番号は遺構の種類毎の通し番号で、種別は土坑（SK）、ピット（本遺跡では径100cm未満の土坑を指す）、集石、焼土である。実測は、原則として土坑、ピット、焼土が縮尺1/20で、集石は規模に応じて1/10もしくは1/20で図化した。

B 調査経過

平成6年度

作業員45名の体制で発掘調査を行った。

調査は、三川村吉ヶ沢遺跡の発掘調査と併行して5月下旬から調査区内の伐木処理、表土除去を開始した。表土除去作業中に、調査区内の農道下に私設の水道管が埋設されていることがわかり道路公団と協議した。当初は、水道管を調査区外に移設の方向で動いていたが、道路公団と水道管所有者との協議で現段階で移設することは無理と判断され、これを了承し、水道管埋設部分を残して調査する事にした。それが決定したのが9月に入つてからである。

6月初めから作業員20名ほど入れて包含層発掘に取りかかった。まず、調査区内南端に沿つて工事車両用道路があり、この道路の移設予定地内に調査区南東隅が入るためここから着手した。6月中旬には、吉ヶ沢遺跡の調査が終了し、本遺跡の調査体制が整い本格的な調査が開始した。調査は、工事工程の都合で変更することもあったが、基本的には調査区西側、中央部、東側の順で行った。先行していた南東隅の調査は6月下旬に終了し、道路公団に引き渡した。

7月に入り、発掘調査は12列まで終了していたが、ここに来て堆土置き場が限界に達していた。そのた

め、12列より以西を排土置き場として利用できないかと考え、この部分の最終確認のため $2 \times 4\text{ m}$ のトレンチを任意の位置に設定し、下層の遺構・遺物の有無の確認調査を実施した。その結果、1次調査では下層の遺構・遺物は認められていなかったが、13H区を中心に土坑、集石が検出され、縄文時代の石器が少量出土した。このため、12列から以西でG列からI列の範囲の下層を全面調査することとし、何も検出されなかったG列北側は排土置き場にすることとした。この後の調査では、上層の調査が終了した段階で $2 \times 4\text{ m}$ のトレンチを各グリッドに規則的に設定し、下層の状況を確認しながら調査を進めた(第4図)。

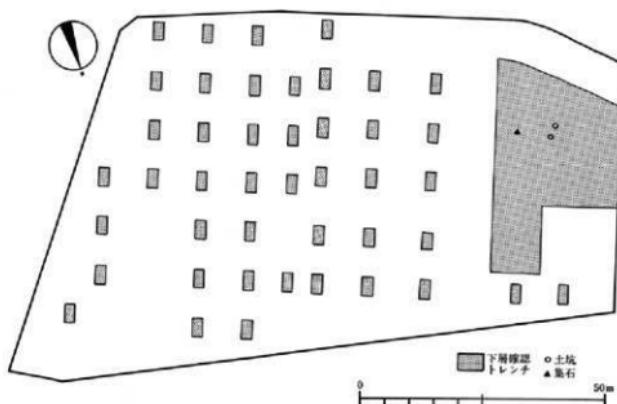
8月下旬までに調査区東側まで作業が進行している。ここまで、遺構の検出は、土坑、集石が認められるがまとまった分布ではなかった。出土遺物もH5区で多く出土した以外は、各グリッドにおいて縄文土器、石器が平均的に散布している状況であった。

9月には水道管理設部分より東側部分を着手した。D4区で縄文時代後期の遺物が多く出土したが、遺構は稀薄であった。

10月には、調査区内南端の工事車両用道路が移設し、墓地部分を除く約 $7,200\text{ m}^2$ を10月26日までに終了した。墓地部分約 100 m^2 は、移転が遅れたため平成7年に調査することにした。

平成7年度

墓地の移転を待って、10月30日から作業員10名の体制で発掘調査を始めた。包含層の残存状況は非常に悪く、出土遺物が少量認められただけで、遺構は検出されなかった。11月10日に調査は終了した。



第4図 下層調査範囲図

5 整理作業

A 方 法

1) 遺 物

出土遺物の大半は縄文時代の土器と石器で、浅箱にして約15箱である。遺物は、遺構出土のものではなく、包含層出土遺物だけである。基礎作業として、すべての遺物に水洗い・註記を施した。註記は、基本的に

白色ポスターカラーなどを使い、遺物に遺跡名、出土グリッド名、層位を明記した。脆い土器は、パインダー処理を施した。

土器 土器は、まず出土グリッド毎に口縁部、胴部、底部の破片に分けてまとめた。接合は、最初大グリッド毎に行い、その後周辺グリッドについてもチェックを行った。そして、報告書掲載資料を抽出し、実測・拓影を実施した。石膏復元は、復元可能なものと補強が必要なものだけを行った。

石器 最初、出土グリッド毎に分けて、器種分類を行った。次に、器種別の出土数や石材などを観察した後、実測図を作成した。出土数の多い器種は、代表的なものだけを報告書に掲載した。また、多くの剥片石器、剝片、石核が出土したが接合作業までは行っていない。

2) 遺構図面

遺構図面は遺構毎の平面図、断面図の確認を行い、番号を付して遺構台帳を作成した。ここで観察の結果、遺構ではないと判断したものは消去した。遺構トレースは、土坑・ビット、焼土が縮尺1/20で、集石などは細かいことから1/10で行った。

B 整理経過

1) 経過

出土遺物の洗浄・註記は、発掘調査の現場で実施し、残ったものについては埋文事業団曾和分室で行った。また、図面・写真の整理や遺構台帳・遺構調査カードの作成は発掘作業と併行して進めた。

本格的に整理作業を始めたのは、平成6年11月からで、基本的に職員1名、整理作業員1~2名を配して行ったが、遺物実測段階において時間がかかるので、職員5名、整理作業員2名で作業を進めた。

2) 体制

各年度毎の体制は以下のとおりである。

平成6年度〔土器・石器実測、遺構図版〕

期間 平成6年11月～平成7年3月

指導 藤巻 正信（調査課第一係長）

担当 斎坂 盛泰（調査課文化財調査員）

平成7年度〔土器・石器実測、図版、原稿〕

期間 平成7年10月～平成8年3月

指導、担当は平成6年度と同じ

月 年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
4年					一次調査 □			一次調査 □				
6年		二次調査 □					整理 □					
7年						二次調査 □	整理 □					

第1表 調査と整理の経過

第II章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

七堀道下遺跡は、東蒲原郡上川村大字九島字七堀道下に所在する縄文時代の遺跡である。ここは、新潟県の北東部、福島県境に近い地域で、急峻な越後山脈、飯豊山地がそびえ立ち、その山系を開析して流れる阿賀野川、常浪川、その他中小の河川が分布し、大小の段丘や山間の盆地を形成している地域である。

上川村は、東蒲原郡に含まれ、村の北側は津川町に、北西側は三川村に接し、南東側は越後山脈の峰々を境にして福島県耶麻郡、大沼郡、南会津郡など広い範囲で接する。村の総面積は361.13km²と広いが、そのうち95%以上が山野である。現集落は、北流する常浪川を中心にして南北に細長い盆地に多く分布し、狭い盆地の平野部、段丘の平坦面、開析された小谷は、水田あるいは畑などに利用されている。

七堀道下遺跡は、阿賀野川と常浪川の合流地点から南へ直線距離で約4km、常浪川から東へ直線距離で750m、標高約75mの常浪川右岸の段丘平坦面上に位置する。現河床との比高は、約15mである。周辺は、常浪川と東小出川の合流点に近く比較的開けた平坦面が広がり、遺跡南東側は、河岸段丘が南北に延びている。

2 歴史的環境

遺跡の分布は、阿賀野川、常浪川やその他中小河川によって形成された河岸段丘上に多く点在している（第5図）。この地域では、これまで常浪川上流域の室谷洞窟や、小瀬ヶ沢洞窟が早くから発掘調査されていて、国内の縄文時代草創期・早期の研究において重要な資料をもたらし【中村1960】、1993年の日本考古学協会新潟大会では、小瀬ヶ沢洞窟遺跡の資料が再検討されている【小野・鈴木ほか1994】。しかしながら、今回の磐越自動車道建設に伴う分布調査等で新たな遺跡が確認されたとはい、その分布は阿賀野川、常浪川流域に偏在している。以下に、旧石器時代から縄文時代の遺跡について概要を述べる。

【旧石器時代】 阿賀野川上流域では、鹿瀬町角神△遺跡（10）しか知られていなかったが【古川1982】、磐越自動車道建設に伴う発掘調査で、三川村上ノ平遺跡、吉ヶ沢遺跡と津川町大坂上道遺跡（22）、猿額遺跡（21）で見つかり資料が増えている。前者は、石刃技法による縦長削片を素材とした杉久保型ナイフ形石器と神山型彫刻刀形石器を伴う石器群が見つかり、大規模に発掘調査されている【沢田ほか1994a、1994b】。後者は、ナイフ形石器、彫刻刀形石器が数点見つかり報告されている【滝沢1995】。

【縄文時代】 この地域の河岸段丘上に点在する遺跡の9割は縄文時代に属するものであろう。概して、中・後期の遺跡が多い。

草創期の遺跡は、上川村小瀬ヶ沢洞窟（53）で、敵籠起線文、爪形文、多綱文などの土器や植刃、半月形石器、有舌尖頭器などの石器が出土し、縄文文化研究において重要な資料になっている【中村1960】。

早期の遺跡としては、東小出川左岸の河岸段丘上に位置する上川村上小島遺跡（40）と、常浪川上流の河岸段丘上に位置する上川村大谷原遺跡がある。上小島遺跡は、同じ磐越自動車道建設に伴って発掘調査が行われ、早期末から前期前半の遺物が見つかっている。大谷原遺跡は、常浪川ダムの建設により平成6年から上川村教育委員会が発掘調査を実施し、早期中葉の住居跡が検出されている。

前期の遺跡としては、同じ磐越自動車道建設に伴って、上川村北野遺跡（34）が発掘調査された。北野

遺跡は、常浪川左岸の河岸段丘上にあり、約5,000年前に会津地方の沼沢火山から噴出した火山灰を由来とする洪水堆積物を挟んで2枚の文化層がある。その沼沢火山灰層の上からは、中期末～後期初頭の集落跡、火山灰層の下からは、前期末を主体とする集落跡が見つかっている〔南1994〕。その他に、津川町震額遺跡(21)、津川町中棚遺跡(20)でも前期末の資料が報告されている。〔滝沢1995〕。

中・後期の遺跡は、この地域で最も繁栄を迎える、確認されている遺跡が多い。しかし、発掘調査で、集落跡全体が明らかにされている例は少ない。先述の北野遺跡の調査で中期末～後期初頭の住居跡、炉跡、土坑群などが検出され、段丘上に形成された集落像が明らかにされている。その他に、津川町原遺跡(2)、同町古志王遺跡(25)が発掘調査されている。前者は、中期後半～後期中葉が主体である〔山武考古学研究所1984〕。後者は、中期中葉が主体である。

晩期の遺跡は、津川町入道岩洞窟(41)、上川村人ヶ谷岩陰遺跡(52)などがある。人ヶ谷岩陰遺跡は標高350mに位置し、晩期終末の土器が出土している〔小野1986〕。

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	大師堂	縄文後期	19	宮野	縄文中・後期	37	キシカ杉	縄文後期
2	原	縄文中～晩期	20	中棚	縄文前・中期	38	大屋敷	縄文中～晩期
3	角嶋若陰	縄文中～晩期	21	猿	縄文前・中期	39	下小鳥	縄文後期
4	角嶋山	縄文後期	22	大坂上道	縄文中・後期	40	上小鳥	縄文早期
5	角嶋岩陰	縄文後期	23	今井野	縄文	41	入道岩洞窟	縄文晚期・弥生
6	灰塚山	縄文後・晩期	24	上鉄砲町	縄文中・晩期	42	開	後縄文
7	蘆鱗山東方	縄文	25	古志王	縄文中・後期	43	石畠	縄文後・晩期
8	大鹿癪	縄文後期	26	金鉢清水	縄文	44	粟瀬A	縄文中・後期
9	深戸	縄文中・後期	27	上ノ山	縄文・平安	45	粟瀬B	縄文中・後期
10	角神A	旧石器文	28	羽黒林	縄文	46	谷地	縄文中・後期
11	角神B	縄文	29	奥田	縄文	47	中山	縄文
12	角神C	縄文	30	中島	縄文	48	山口	縄文
13	角神D	縄文中期	31	大舟	縄文	49	源	縄文中～晩期
14	長者屋敷	縄文中～晩期	32	エゾマ坂	旧石器	50	八田蟹	縄文
15	中貝	縄文中期	33	古天神	縄文後・晩期	51	揚城	縄文晩期
16	根垂場	縄文後期	34	北野	縄文前～晩期	52	人ヶ谷岩陰	縄文晩期
17	赤岩	縄文中～晩期	35	楠川	縄文中～晩期	53	小瀬ヶ沢	縄文草創～早期
18	六角原	縄文中期・平安	36	天満	縄文			

第2表 周辺の遺跡一覧



第5図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図
(国土地理院発行 平成4年「津川」 平成元年「大日岳」 昭和55年「御神楽岳」 平成2年「野沢」 1:50,000原図)

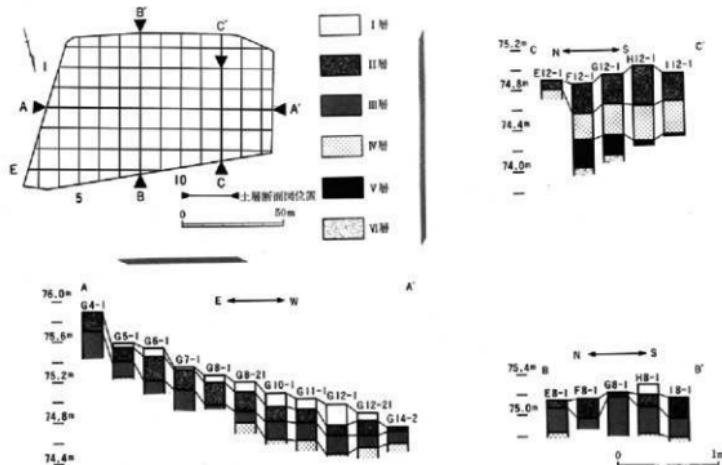
第III章 遺跡

1 層序 (第6図)

七堀道下遺跡は、常浪川右岸の段丘上に位置し、標高は約75mを測る。この段丘は、常浪川の蛇行によつて形成されたもので、現在は宅地・畑・水田となっている。基本層序は、I層からVI層まで大別された。I層は、現表土で層厚は15~20cmである。II層は、暗褐色土シルトで粘性・しまりに欠ける。層厚は10~40cmである。III層は、褐色土で層厚は10~30cmである。IV層は、黄褐色土砂質シルトで、層厚は平均15~20cmである（沼沢火山灰層）。この層は、約5,000年前に福島県大沼郡金山町の沼沢火山から噴出したテフラに由来する洪水堆積物である。本遺跡では、調査区の東端と西端の比高が約1mあり、東端ではIV層が堆積していない所がある。V層は、黒褐色土シルトで、しまりがある。厚さは、15~25cmである。VI層は、黄橙色土である。粘性・しまり共にあり、礫を多く含む。

縄文時代の遺物包含層（II層とV層）は、沼沢火山灰層（IV層）を間層に2枚確認でき、本書では沼沢火山灰層より上のI~III層を上層とし、沼沢火山灰層より下のV~VI層を下層と呼称する。

上層の遺物の時期は、縄文時代中期から晩期まであるが、それらは明確な層位差を持って出土している。また、調査区の中に近年まで畑と墓地に利用されていた箇所があり、そこでは攪乱が多く入り層序が明瞭ではない。



第6図 七堀道下遺跡土層柱状図

2 遺構

検出された遺構は、上層で土坑・ピット19基、集石3基、焼土1基、下層で土坑2基、集石1基である。上層の遺構は、調査対象区全体に分布するが、大半は遺物が多く出土した南東側と集石遺構が検出された北側に偏りがあるように思われる。土坑でその機能を予想できるものは検出されなかった。上層の各遺構の年代は、推定できる遺物が出土していないので明確にできないが、包含層から出土した土器が縄文時代中期初頭と後期前葉から中葉に中心があるのでこのどちらかの所産と思われる。下層の遺構は、調査対象区西側からのみ検出できた。下層の遺構も年代を推定できる遺物が出土しなかったので明確にできないが、沼沢火山灰層より下位から検出されたので縄文時代前期末以前の所産と思われる。

A 土坑・ピット

上層の土坑・ピット

S K 1 (図版3) E 12-19区に位置する。平面形状は、東西に長い梢円形と思われるが、南東部の3分の1は試掘坑により失っていた。規模は、長径216cm、短径168cm、深さ43cmを測る。検出面はⅢ層上面で、底面は平坦でⅥ層まで達している。覆土は3層に分けられ、すべてしまりがない。最下層の3層は沼沢層のブロックが多量に含まれている。出土遺物はなかった。

S K 4 (図版3) E 12-20区に位置する。平面形状は、東西に長い不整梢円形を呈し、規模は長径140cm、短径88cm、深さ29cmである。壁面は、西側が緩やかで、東側は急傾斜で窪んだ底面に落ち込む。検出面はⅢ層で、掘り込みはⅤ層上面まで達している。覆土は7層に分けられ、1層上部で縄文土器片が出土したが、本遺構との関連性は薄い。

S K 5 (図版3) E 9-3区に位置する。平面形状は、東西に長い梢円形である。規模は、長径103cm、短径79cm、深さ36cmを測る。壁面は緩やかで、底面は窪んでいる。検出面はⅢ層である。覆土は3層に分けられ、1層は微細な炭化物を含んでいた。出土遺物はなかった。

S K 6 (図版3) I 6-2区に位置する。南半分は試掘トレンチにより失っていたが、平面形状は南北に長い梢円形を呈するものと思われる。規模は、残存部分で長径161cm、短径153cm、深さ44cmで、底面に緩やかに落ち込む。覆土は2層に分けられ、底面はⅣ層まで達している。検出面はⅣ層である。出土遺物はなかった。

S K 7 (図版3) H 7-5区に位置する。平面形状は、不整円形である。規模は、長径98cm、短径87cm、深さ42cmで、底面は幅50cm程の平坦面である。検出面は、Ⅲ層で、掘り込みはⅣ層下部まで達する。覆土は1層のみでしまりがない。出土遺物はなかった。

S K 8 (図版4) 調査区南東部のH 5-8区に位置する。平面形状は、円形に近いが東側が突出している。規模は、長径356cm、短径322cm、深さ64cmである。壁面は緩やかに平坦な底面に向かって落ち込む。検出面はⅢ層である。覆土は7層に分けられ、3層と5層は炭化粒を含んでいたが、断面を観察すると風倒木痕の埋没状況に類似しているのでこの可能性もある。出土遺物は、1層上面で少量あったが直接この遺構に関わるものでないと判断した。しかし、この付近は最も遺物出土量が多かった区域で、それらは縄文時代後期前葉から中葉までの所産のものである。

S K 9 (図版4) F 7-1区に位置する。平面形状は不整円形である。規模は、長径104cm、短径96cm、深さ12cmで、掘り込みが浅い。壁面は、凸凹した底面に向かって緩やかに落ち込む。検出面はⅢ層で、

覆土は2層に分けられた。2層とも黒色が強くしまりがない。出土遺物はなかった。

S K10 (図版4) 調査区西部のD 4-9区に位置する。平面形状は、東西に長い楕円形で、規模は長径266cm、短径172cm、深さ40cmである。底面は長径230cm、短径124cmの平坦面で、壁面は急傾斜で落ち込む。検出面はIII層である。覆土は3層に分けられ、1層に少量炭化粒が混じっていた。出土遺物はなかったが、周辺では繩文時代後期前葉から中葉までの遺物が多く出土した。

S K11 (図版4) F 6-3区に位置する。平面形状は、東西に長い楕円形である。規模は、長径133cm、短径82cm、深さ25cmを測る。壁面は、平坦な底面に緩やかに落ち込む。検出面はIII層である。覆土は4層に分けられ、2層と4層はよくしまっていた。出土遺物はなかった。

S K14 (図版4) D 5-14区に位置する。水道管が埋設されている所であったので、明確に検出できなかった。西側壁面は残存状況が良くなかったが、平面形状は、隅丸不整長方形であろう。規模は、残存部で縦87cm、横85cm、深さ46cmである。壁面は平坦な底面に向かって急傾斜で落ち込む。検出面はIII層である。覆土は4層に分けられ、かなりしまりがある。出土遺物はなかった。

S K15 (図版5) 調査区南西部のJ 13-11区に位置する。平面形状は不整円形で、規模は長径116cm、短径106cm、深さ18cmである。壁面は、緩やかな傾斜で平坦な底面に落ち込む。検出面はIII層である。覆土は3層に分けられ、すべてしまりがない。出土遺物はなかった。

S K16 (図版5) 調査区南端のJ 8-23区に位置する。平面形状は、東西に長い不整楕円形を呈し、規模は長径90cm、短径70cm、深さ20cmである。底面は凸凹していて、壁面は西側と南側が急傾斜で落ち込む。検出面はIV層である。覆土は2層に分けられた。1層は微細な炭化物を含み黒色を呈している。2層は粘土質でよくしまっている。出土遺物はなかった。

S K17 (図版5) I 5-13区に位置する。西側の大半は試掘坑により削られていた。平面形状は、南北に長い不整楕円形を呈するものと思われる。規模は残存部分で長径146cm、深さ39cmを測る。底面は窪んだ形状で、壁面は緩やかに傾斜する。検出面はIII層である。覆土は6層に分けられ、出土遺物はなかった。

S K18 (図版5) I 13-18区に位置する。平面形状は、円形に近い。規模は長径100cm、短径88cm、深さ15cmを測る。底面は凸凹が激しく、壁面は緩く傾斜している。検出面はIV層である。覆土は3層に分けられ、出土遺物はなかった。

1号ビット (図版5) D 4-8区に位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は長径92cm、短径76cm、深さ22cmで、深く窪んだ形状である。検出面はIII層である。覆土は4層に分けられ、3層を除いて微細な炭化物が認められた。3層はIV層の崩落土である。出土遺物はなかった。

2号ビット (図版5) H10-19区に位置する。平面形状は、東西に長い不整楕円形を呈し、規模は長径73cm、短径50cm、深さ22cmである。壁面は北側が急傾斜で落ち込むほかは緩やかな傾斜で、底面は平坦である。検出面はIV層である。覆土は4層に分けられ、すべてしまりがない。出土遺物はなかった。

3号ビット (図版5) H12-3区に位置する。平面形状は、不整円形を呈する。規模は、長径99cm、短径90cm、深さ49cmである。壁面は平坦な底面に向かって急傾斜で落ち込む。検出面はIV層である。覆土は11層に分けられた。IV層の崩落土と考えられる4層、8層、11層はよくしまっていた。微細な炭化物が1層、2層、7層で認められた。出土遺物はなかった。

下層の土坑

S K 2 (図版3) H13-11区に位置する。平面形状は、長軸が北西に傾いた不整規円形で、規模は長径125cm、短径86cm、深さ3.8cmである。土坑の上部を削り過ぎたため、掘り込みが浅い。壁面は緩やかな傾斜で底面に落ち込んでいる。検出面は沼沢層下のV層上面で、覆土は2層に分けられる。覆土中には砂礫が含まれ、底面では拳大の礫が地山から吹き出している。出土遺物はなかった。

S K 3 (図版3) H13-6区に位置し、S K 2に隣接している。平面形状は東西に長い梢円形を呈する。規模は、長径181cm、短径95cm、深さ18cmを測る。検出面は沼沢層下のV層上面で、S K 2と同様に上部を削り過ぎたため掘り込みが浅く、壁面は緩やかな傾斜で平坦な底面に落ち込む。覆土は2層に分けられ、いずれも粘性が弱くしまがない。出土遺物はなかった。

遺構名	位置	層位	上端(長径)	上端(短径)	下端(長径)	下端(短径)	深度	備考
S K 1	E 12-19	III層	(216)	(168)	(166)	(120)	43	
S K 2	H13-11	V層	125	86	100	58	14	
S K 3	H13-6	V層	181	95	164	77	18	
S K 4	E 12-20	III層	140	88	54	44	29	
S K 5	E 9-3	III層	103	79	28	23		
S K 6	I 6-2	IV層	(161)	(153)	(76)	(58)	44	
S K 7	H 7-5	III層	98	87	50	422	42	
S K 8	H 5-8	III層	356	322	199	130	64	風倒木?
S K 9	F 7-1	III層	104	96	87	72	12	
S K 10	D 4-9	III層	266	172	230	124	40	
S K 11	F 6-3	III層	133	822	96	68	25	
S K 14	D 5-4	III層	(87)	(85)	672	62	46	
S K 15	J 13-11	III層	116	106	86	75	18	
S K 16	J 8-23	IV層	90	70	76	34	20	
S K 17	I 5-13	III層	(146)		(48)		39	
S K 18	I 13-18	IV層	100	88	78	64	15	
1号ピット	D 4-8	III層	92	76	49	46	22	
2号ピット	H10-19	IV層	73	50	30	22	25	
3号ピット	H12-3	IV層	99	90	79	14	49	
1号焼土	H 5-24	II層	54	50			16	

第3表 土坑・焼土観察表

単位はcm ()は欠損

B 焼 土 (図版5)

1基のみ検出された。調査区南端のH 5-24区に位置する。ここは、縄文時代後期前葉から中葉の遺物が多く出土した区域である。焼土の形状は梢円形で、その広がりは長径54cm、短径50cm、厚さは16cmである。検出面はII層で、焼土は軟質で不良である。色調は黄褐色を呈し、微細な炭化物が認められた。

C 集 石

上層で3基、下層で1基検出された。上層の集石の分布は調査区北側縁辺部に位置するという特色がある。また、いずれの集石も掘り込みを伴う状態で検出されなかったが、礫を除去した後の観察から2号集石と4号集石は掘り込みを伴っていた可能性がある。

上層の集石

1号集石 (図版6) E 10-13区に位置する。III層上面で検出された。礫の分布は2m四方の範囲におさまる、密集箇所は2か所ある。北側の密集箇所は比較的大きめの割石が集まり、南側の密集箇所は中小

の碎石が多く集まっていた。それらの周りにも大きめの碎石が疎らに点在している。礫の多くは焼けて周縁が赤褐色を呈している。

2号集石（図版6） D9-8区に位置する。III層上面で検出された。礫の分布は、1m四方の狭い範囲に集中している。礫は同一個体のものが割られている状態で、大きさは小片から拳大のものがある。焼けている礫はなかった。礫の下の土が暗褐色を呈していたことから掘り込みを伴っていた可能性がある。

3号集石（図版6） D7-15区に位置する。III層下部で検出された。礫の分布は東西1m、南北2mの範囲に散乱している。礫の大きさは拳大のものが多く、焼けた礫はなかった。

下層の集石

4号集石（図版6） H12-22区に位置する。V層上面で検出された。礫の分布は、2m四方の狭い範囲に密集している。礫の大きさは拳大のものが多く、焼けた礫が少量認められた。礫を除くと下の土が炭化物を含み黒色を呈していたことから掘り込みを伴っていた可能性が高い。

3 出土遺物

1)

本遺跡から出土した遺物は、平箱にして15箱の量である。これらは、縄文時代の土器・石器がその大半を占め、他にごく僅かながら縄文時代の土器片円盤、平安時代と中世の須恵器、近世の鏡貨などがある。このうち上層から出土した遺物が大半で、下層から出土した遺物は石器が18点だけで、土器は出土しなかった。上層の遺物は、遺構に伴うものではなくすべて包含層から出土したものであるが、D4区とH5区の2か所で縄文土器と石器が多く出土するところが認められた。その出土遺物の所属時期は、縄文時代後期前葉～中葉のもので、この遺跡の主体となる一群である。

A 土 器

出土土器は、縄文土器が大半で、須恵器片は僅かに3点である。なお、下層から土器は出土しなかった。

1) 観察表の記載

観察表には、出土土器をすべて網羅しておらず報告書掲載資料のみを記している。項目は、出土地点、時期、分類、部位、色調、胎土、焼成、内面調整、器種、法量、文様などの特色、備考である。

番 号 図版掲載の番号である。

出 土 地 点 出土したグリッド名と層位を記した。一次調査出土遺物は、「カクニン」と表現した。

時 期・分 類 縄文時代の土器は、帰属年代を重視して大別し、型式・系統により細別可能なものは分けた。詳細は次項に後述する

部 位 遺存部位について記した。呼称は、口縁部、胴部、底部に分け、復元して全体像が明らかにできるものは「復元」と表現した。

色 調 土器の器表面の主体となる色調を、標準土色帖【小山・竹原1991】を参考に記した。

胎 土 土器の胎土を肉眼観察し、粗砂、細砂の2種に分けた。特に、砂粒が多い場合は「多」を付記した。胎土中に含まれる鉱物岩片等は、石英、雲母、白色粒子等が顕著に認められる場合にのみ記した。

1) 平箱の法量は、34×54.5×20cmである。

- 焼 成 器面・断面の観察から良、普通の2種に分けて記した。
- 内面調整 内面の調整についてナデ、ミガキの表現で記した。
- 器 種 深鉢形土器、鉢形土器、浅鉢形土器、甕形土器、壺形土器（以下、それぞれ「形土器を省略」）に大別し、記した。
- 文 様 特徴ある文様について記した。記述にあたっては、外面の口縁部から胴部へ、内面の文様の順に記した。
- 法 量 すべて推定復元値である。
- 備 考 同一個体があるものは「No○と同一」と記述した。その他、特記事項を記した。

2) 縄文土器

出土した縄文土器は、浅箱にして9箱程である。これらは、縄文中期～晚期まで認められるが、主体となるのは後期前葉から中葉のものである。縄文土器の出土状況の傾向を見ると、中期と晚期のものは、調査区の中半から西側に、後期のものは、H5区とD4区の集中域を中心に東側に多く繋まりがあり、時期毎に利用区域が若干異なる（第7図）。今回の調査で出土した土器は細片となって出土したものが大半で、その全体像が把握できる例は極めて少ない。しかしながら、これらの土器について次のような大まかな時期分類を行った。細片で文様構成が把握しにくいものや縄文施文だけの粗製土器は所属時期に不安があるが、出土地点・胎土などを考慮して判断した。また、I群土器とIII群土器は、型式・系統毎に細別できるためその中で分類を行っている。なお、各群は、層位差を持って出土しなかったので層位毎には取り上げないこととする。

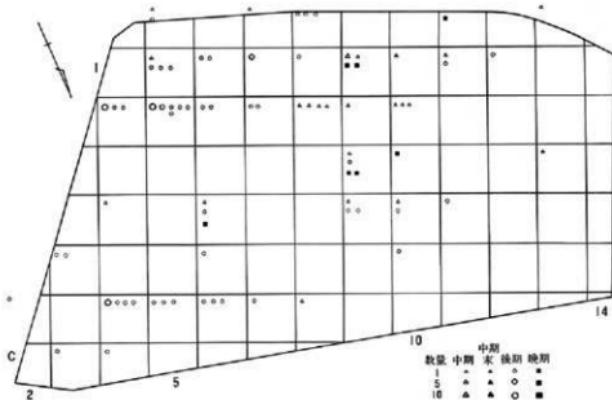
I群土器	縄文時代中期前葉から中葉
II群土器	縄文時代中期末
III群土器	縄文時代後期
IV群土器	縄文時代晚期

I群土器（国版7・8-1~29）

I群土器の占める割合は、III群土器に次いで高いが量的には少ない。出土土器には、次の系統の土器が認められた。関東の阿玉台式系の土器（a類）、北陸の新保・新崎式系の土器（b類）、東北大木式系の土器（c類）、その他（d類）である。この中で、b類が量的に若干多いが、これは細片が多いためであり、どの系統（a～c類）が本遺跡で主体となるかは資料が少ないと判断できない。

a類（1～7） 1は深鉢で、有節沈線が単列で施されている。口縁部の文様構成は、有節沈線の描く形状が單位毎で異なり、一部で口唇部を粘土紐で波状にしたり、内面印刻を施している。2は、幅の広い沈線が多条に施され、口唇部に刻目を加えている。

3と4は同一個体で、外面に輪積み痕が残るものである。3は指頭押圧したような痕跡があり、4は刺突文が施されている。5は胴部片で、隆帯に沿って有節沈線が施されている。6・7は同一個体で、刺突文、沈線文が文様モチーフに用いられ幾何的な文様が描かれている。1・6・7は胎土に雲母・石英が顯著に認められた。



第7図 土器時期別出土分布図（報告書掲載資料のみ）

b類 (8~19) 半截竹管による半隆起線文・爪形文などを特徴とする。すべて深鉢の破片で、8~11は口縁部片で、12~19は胴部片である。8~10は三角形印刻手法をとるもので、細線文上に三角形印刻を加えるもの (8・10) と繩文施文上に逆三角形印刻が加えられているもの (9) が認められる。11は1条の横位半隆起線文の下に縱位平行半隆起線文が施されている。12は縱位に、13は横位に平行半隆起線文が施されている。14は横位の半隆起線文と爪形文が巡る。15~19は撚糸文あるいは木目状撚糸文が施されている胴部片である。器形は、細片のため全体像を把握することはできないが、おおよそ円筒形のものと (8・9・15) と口縁部が内湾するもの (10・12~14) に分かれるのではないかと思われる。

c類 (20~26) 20は梢円形区画隆帯が巡る。21は胴部をY字状隆帯が縱位に区画し、区画内に波状文などが施されている。22・23は胴部に渦巻き状の曲線が描かれるものであろう。24~26は同一個体で、口縁上端は梢円形隆帯区画内に縱位半隆起線文が施されている。また、24と26は円形の突起が付き、24の突起の縁には有節沈線が加えられている。

d類 (27~29) 27は隆帯文系の土器で、隆帯には綾杉状の沈線が施されている。28は器形がキャリバー形となるもので、文様は半隆起線文を基調とする。29是有節沈線が施されている。

II群土器 (図版 8~30・31)

II群の資料は、30と31の2点だけである。30は縱位に区画隆帯が付き、それに沿って幅の広い沈線が施されている。31は口縁に向かって大きく外反しながら開く器形で、文様は縱方向にU字状文を施し、胴部下半は波状沈線で区画されている。

III群土器 (図版 8~11~32~319)

本遺跡で主体をなす一群である。その内容を概観すると、堀之内2式、加曾利B1式、加曾利B2式期の各型式にそれぞれ併行する資料が主体的に存在し、これらより時期が古くなる在地系の三十種場、南三

十種場式期の土器が小量ながら見出せる。器種には、深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口土器がある。

本遺跡資料では、加曾利B 1式以降に顕著に現れる横位平行沈線を縦位に区切る区切り文が見られないため壺之内2式併行の土器との区別が難しい。このため、細部にわたる型式分類は行わないが、器種・文様を重視した細別を行う。

深鉢形土器 (32~99)

a類 (32~35) 縦位に平行沈線が施されるものである。32は口縁部に向かって大きく開き、口縁上端でくの字に外反する。口縁上端は、無文である。33~35は胴部片資料である。32は他の資料と異なり、鋭利な工具で縦位に沈線が施されている。

b類 (36~43) 横位に平行沈線で曲線文が施されているものである。36は胴部上半から少し外反しながら開く器形で、文様は上限と下限にある平行沈線間に繩文を施した横帶文が延びて渦巻き状に入り組んだような構成になっている。37・41は同一個体で、平行沈線が同心円状に施されている。42・43は地文に平行沈線が施され、沈線間は無文帯となっている。

c類 (44~69) 横位の区画平行沈線を基調とするものである。これらを、平行沈線の種類、横位隆帯の有無で6種に細分する。

c₁類 (44・60) 横位区画沈線間が幅広いものである。44は口縁部が直立して立ち上がるもので、繩文施文の後、区画横位沈線が施されているが、沈線間以外は磨消しされている。口唇部には、小突起が付く。60は胴部片で小型の深鉢である。胴部には、繩文施文の後、横位平行区画沈線が加えられている。上端の沈線間には、上下の沈線に沿って点列文が施されている。

c₂類 (45~59) 欠損しているため1条ないし2条までしか横位沈線が把握できないものである。45~55は口縁部片で、56~59は胴部片である。45は無文に1条横位の沈線が施されている。46・48・49は比較的に幅の広い沈線である。54の外面は1条の横位沈線のみで、内面は突起に盲孔を施し、上端は2条の刻目帯になっている。55は繩文施文の後、区画横位沈線が施されていて、口縁上端は幅広い無文帯で、口唇部には刻目が加えられている。56~58は繩文施文後に、区画横位沈線が加えられている。59は横位区画沈線の施文が先で、その後区画内に繩文を施している。

c₃類 (61) 間隔の狭い数条の区画横位平行沈線による横帶文が描かれ、沈線間にのみ繩文が残るものである。口縁は外傾しながら立ち上がり、波頂部に突起が付く。

c₄類 (62・63) 口縁部に横位刻目隆帯が巡っているものである。62は口縁部に1本の刻目隆帯が巡り、下半は区画横位沈線が施されている。波状口縁の頂部ははげているが、突起が付いていたものと思われる。63は波状口縁の頂部に小突起が付き、1本の横位刻目隆帯が巡る。下半は、欠損しているため把握できないが、62と同じように横位沈線が施されているものと思われる。

c₅類 (64~67) 磨消し部分がなく、平行沈線を施すものである。64~66は横位平行沈線と斜位の平行沈線が施されている。64は波状口縁の頂部に耳状の突起が付く。

c₆類 (68~69) 無文で、その上に数条の横位平行沈線が施されているものである。

d類 (70~72) 無文を基調とする波状口縁の破片である。70・72は口唇部に刻目を加えている。71は口縁に沿って1条の沈線を加えている。

e類 (73~88) その他のものを総める。73~79は口縁部片で、80~85は胴部片である。73は口縁部の上端がくびれて外反し、上端は無文帯で、下半は繩文が施されている。74は口縁に向かって外に開きなが

ら立ち上がる器形である。文様は横位斜線文帯が描かれ、斜線文帯間に条痕文が施されている。口唇部には、小突起間に刻目が加えられている。75・76は同一個体の口縁部片で、その胴部片が82・83である。文様は、地面上を幅の広い沈線で曲線状に描いている。77は円孔が通なり、一部が隆起して立体的となる。78は口縁部が外に開きながら立ち上がる器形である。文様は沈線文で、縦位沈線文間に渦巻き状やV字状になるものなどが描かれている。79は交差する刻目隆帯を持つ。縄文時代後期初頭に属するものであろう。80・81は同一個体の胴部片で、81には区画横位沈線間にS字状連鎖文様が施されている。84は櫛齒状施文具による連鎖文様が描かれている。なお、84は櫛齒状施文ということで後述するf類と同等であるが、外面にかなり丁寧なミガキがかかっているので本類に含めた。

f類 (86~99)

本類は全面縄文だけ施文されているものと、加曾利B式期の粗製土器で櫛齒状工具で施文されたものを纏める。86~92・94・95~97は、全面縄文が施された資料である。加曾利B式期の粗製土器が2種認められた。ひとつは、櫛齒状工具で施文されているもの (93・98・99)、もうひとつは羽状縄文が施されているもの (96・97) である。

鉢形土器 (100~108)

100は内湾する器形で、器面は無文である。101・102は外面無文で、内面の口縁上端に1~2条の横位沈線が巡る。103・108は口唇部に刻目が施されている。104は器形が外傾しながら真っ直ぐに立ち上がる。内外面は、かなりミガキがかけられ、表面は精緻である。105・106は無文で、円孔が施されている。105には刻目が施された小突起が付く。

浅鉢形土器 (109~111)

3点とも同一個体のもので、109・110が口縁部片で、111が胴部片である。浅鉢の内面に文様を描くこの資料は、加曾利B1式期に著しく現れる。外面は無文で、内面の文様は上端の隆帯に刻目を施し、その下に点列文、断面三角形の隆起線、数条の横位平行沈線が巡る構成となっている。

壺形土器 (112~115)

112は口縁部欠損が著しいが、口縁から底部まで復元する事ができたものである。器形は、口縁部が胴部から直立してたた上がり、胴部は膨らみ、中位に最大径がある。文様は、平行沈線間にのみ縄文を施した横位文を基調として、胴部中位に方形区画状の文様が連結して横位に展開する。口縁部には、横位平行沈線文間に縦位方向に曲線が施されている。113・114は同一個体で、113は胴部片、114は底部片である。区画横位沈線文を基調としている。115は口縁部に向かってくの字に外反する。胴部上端に櫛齒状帯が巡り、その下に点列文を中心に羽状沈線、斜位方向の平行沈線が施されている。

注口土器 (116~119)

注口土器としたが、注口が付いているものが多く、細片のため判断し難い。器形、類例で見て判断した。116・117は同一個体の口縁部片で、口縁部上端に横位平行沈線が巡り、その下に74と同様の斜線文帯が施されている。胴部に向けては、斜位の平行沈線が加えられている。口唇部には刻み目が加えられ、内面口縁上端に突帯がつく。器面はかなりミガキが掛かれている。118・119は沈線による曲線や平行沈線が描かれている。

IV群土器 (図版12~120~126)

この一群の土器は、量的には少ない。器種は、深鉢、甕、浅鉢があり、深鉢と甕は、精製 (122・123)

と粗製(120・125・126)のものがある。時期は大洞A式併行であるが、石川日出志氏によって設定された鳥屋式〔石川1982〕でいうと鳥屋II式期(120・121)と鳥屋I式期(123~126)に細別できる。120は粗製の深鉢で、口縁部から底部まで復元できたものである。最大径が胴部上位にあり、口縁部は内湾し、端部を外面に折り返している。折り返し口縁には横方向に、胴部には縱方向に擦糸文が施されている。121は浅鉢で、口縁上端が無文帯で、その下がメガネ状隆帯、浮線文の構成となっている。

123は深鉢で、口唇部には突起が付き、口縁部上端に4条の横位平行沈線が巡る。124は細片だが、口縁部上端に浮線文が施されている。125・126は粗製の甕と考えられる胴部片である。外面には、縱あるいは斜め方向に条痕文が施されている。

底部片資料(図版12-127~132)

127~128は網代甕が、129は木葉甕が認められるものである。131・132は小型品の底部と思われる。132はミニチュア土器の台部分である。

3) 須恵器(図版12-134~135)

134は平安時代の甕の胴部片と思われる。外面にのみ平行叩き目が残っている。135は中世須恵器の甕の胴部片と思われるもので、外面に平行叩き目が残る。

B 土製品(図版12-133)

133は土器片円盤である。断面に少し磨滅した箇所が認められた。Ⅲ群土器に伴うものと思われる。

C 石 器

1) 観察表の記載

観察表の記載は、出土石器をすべて網羅しておらず報告書掲載資料のみを記している。項目は、出土地点、長さ、幅、厚さ、重量、石材、素材、状態、特徴、備考を基本とし、器種によって、打面長さ、打面幅、刃部長の各項目を加えた。

番号 図版掲載の番号である。

出土地点 出土したグリッド名と層位を記した。

法量 計測は、実測図の上下方向を長さ、左右を幅としている。石器の据え方は、器種毎に異なる。

石鎚、石錐は尖頭部、錐部をそれぞれ上にして計測した。石匙は、つまみ部を上にしている。

楔形石器は、剥離痕のある両端を上下にしている。不定形石器は、基本は打面を上にしているが、打面方向がわからないものは、刃部を側に置くかあるいは長軸を上下にしている。三脚石器は、長軸方向を上下にし、実測図の左側を正面とする。打製石斧、磨製石斧は、刃部を下にした据え方である。磨石類は、長軸を上下にしている。刃部長は、不定形石器と石斧類に付け加えた項目である。その表記で不定形石器の場合、「位置+数値」となっている。

位置の略称は次の通りである。ミギ=右側縁、ヒダリ=左側縁、セン=先端。また、欠損などがあり数値の正確性が欠けるものはカッコ書きをしている。

石材 真岩、流紋岩、緑色凝灰岩等の使用されている石材を記した。

素材 剝片石器の打面方向を上にして、長さが幅より大きいものは縦長剥片、幅が長さよりおおきいものは横長剥片とし、表記はそれぞれ「タテ」、「ヨコ」としている。

状 態 完形のものは「完」とし、欠損箇所のあるものその部位を記した。但し、不定形石器は、欠損しているのかどうか識別が難しいのでこの項目を除いた。

特 徴 形態上の特徴について記した。

備 考 特記事項について記した。

資料によっては、判別ができない項目があり、それらは空白にした。

2) 器種別説明

石器は、上層と下層出土別に分けて集計を行った。出土した石器（剥片も含む）は上層で1822点、下層で18点である（第4・6表）。石器器種は、石鎚（1～10）、石錐（11）、石匙（12・13）、楔形石器（14）、不定形石器（15～32）、三脚石器（33）、打製石斧（34～40）、磨製石斧（41～44）、磨石類（45～47）、石器素材を提供した石核（18～51）の種類がある。上層の石器出土状況は、H5区周辺、D4区周辺、H10区周辺の3か所で多く出土している傾向がある（第8・9図）。このことは、縄文後期の土器群がH5とD4区周辺に中心があることと、中期の土器群がH10区周辺に中心があることとそれぞれ重なる。石材別では、粗粒な流紋岩がかなりの比率を占めており、石材产地は限定されるものと考えられる（第5表）。

石鎚（図版13-1～10） 欠損品も含めて13点出土している。出土地点は、調査区北西側のI9区周辺で多く出土している。形態的に見ると、凹基鎚で抉りの浅いもの（1・2）、凹基鎚で抉りの深いもの（3～7）、平基鎚（8）、有基鎚（9・10）となる。基部形態で分けたわけだが、図示しなかったものも含めて凹基鎚が10点ありかなり高い比率を示す。本遺跡の場合、後期前半から中葉にかけて中心があるので、凹基鎚が多いのもその特徴を示していると思われる。個々の形態では、3・5は側縁が鋸歯状となり、8は直線状である。9と10は有基鎚だが、9は基の部分が大きく、10は側縁部と基の区別が不明瞭である。石材は、流紋岩が主体を占める。

石錐（図版13-11） 1点のみ出土している。小型で、錐部の加工は入念に施されている。

石匙（図版13-12・13） 全部で5点出土している。縦型になるものが3点、横型になるものが2点である。図示した12は緑色凝灰岩製で、つまみ部周辺と側縁刃部の二次加工は両面に施されている。特に、側縁刃部の剥離は丁寧である。13は、側縁刃部にあまり二次加工が施されていないが、つまみ部を大ざっぱな剥離で作出している。石材は、流紋岩である。

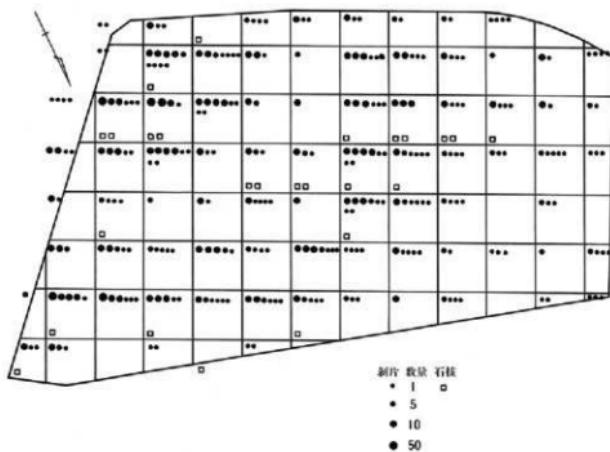
楔形石器（図版13-14） 1点のみ出土している。14は縦長剥片を素材としたもので、長軸に一対の剥離痕を持っている。

器種	石鎚	石錐	石錐	楔形石器	不定形石器	打製石斧	磨製石斧	磨石類	石核	剥片類	不明	合計
出土数	13	5	1	1	245	7	5	3	25	1516	1	1822

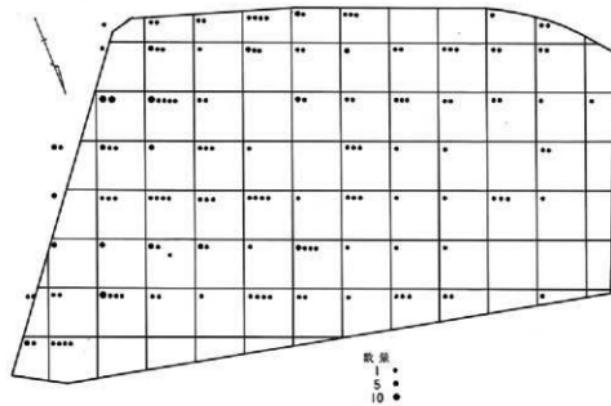
第4表 上層石器器種別出土数

石材	頁岩	流紋岩	凝灰岩	安山岩	珪質頁岩	黒曜石	鐵石英	玉髓	チャート	泥岩	合計
合計	368	823	99	13	47	4	39	6	8	5	1516

第5表 上層剥片石材別出土表



第8図 刺片・石核グリッド別出土分布図



第9図 不定形石器グリッド別出土分布図

器種	不定形石器	剝片	石核	合計
出土数	2	15	1	18

第6表 下層石器種別出土数

石材	流紋岩	頁岩	凝灰岩	珪質頁岩	合計
合計	13	3	1	1	18

第7表 下層石器石材別出土数

多種多様である。それ故、ここでは細かな分類は行わず、大きな共通性だけを抽出し次のように大別した。連続した二次加工を施したもの (15~23)、不連続の大剝離を施しているもの (28)、不連続の剝離を施しているもの (27・29)、両面に二次加工が施されているもの (24~26)、大剝離で鋸歯線状になるもの (30~32) に分けられる。このうち、23は下層から出土したものである。19・32は礫素材に二次加工が施されている。出土状況は、H4区とH5区、D4区の2地域で多く出土している(第9図)。これは、土器の集中域と重なり、住居跡などの遺構は検出されなかったもののこの区域で生活活動が行われていたことを示す根拠となろう。石材別では、流紋岩が全体の45%と高い比率を占める(第8表)。

石材	頁岩	緑色凝灰岩	流紋岩	凝灰岩	鉄石英	玉髓	チャート	安山岩	珪質頁岩	粘板岩	合計
出土数	74	23	111	18	6	5	1	1	5	1	245

第8表 上層不定形石器石材別出土数

三脚石器(図版14~33) 三辺に僅かに抉りがあり、三角形状となるものが1点存在する。流紋岩製で、素材はかなり厚みがある。二次加工は、片面全体に及ぶ。

打製石斧(図版14~15・34~40) 7点出土している。欠損品は基部が失われているもの(34・37)、刃部が失われているもの(40)の3点である。これらを形態で分類すると、彫形(34~38)、短彫形(39・40)に分けられ、37と38は、上部の側縁に抉りが入る。35・36は小型品である。二次加工の施し方は、背面側が自然面を大部分残して剝離が行われているもの(34、38、39)、剝離がほぼ全面に及んでいるもの(35~37)が存在する。腹面側は、39の全面に及んでいるものを除けばすべて周縁に施されている。刃部形態は、円刃両刃(34)、偏円刃片刃(35・36)、直刃片刃(37)、直刃両刃(38)、円刃片刃(39)がそれぞれ存在する。また、36の刃部は、先端から中程にかけて光沢痕が明瞭に観察される。

磨製石斧(図版15・16~41~44) 5点出土したが、その大部分は欠損品である。44以外は、側面の穀が明瞭で、横断面形が隅丸長方形を呈する。刃部形態がわかるものは3点しかないが、円刃両刃(41・44)と偏円刃両刃(42)が存在する。

磨石類(図版16~45~47) 磨痕、凹痕、敲打痕などが認められる縁で、3点出土した。45は花崗岩製で、両面が磨られ、明瞭に光沢痕が観察できる。46・47は凹痕が認められるもので、2点出土した。46は両面に2カ所ずつ凹痕が存在する。47は正面が2カ所、裏面が1カ所に凹痕が認められる。

石核(図版16~48~51) 剥片剝離作業で残されたものであるが、上層で25点、下層で1点出土している。石材別では、剝片石器と剝片において流紋岩がかなり高い比率で占めていたようにここでも同じ傾向を示す。出土状況を見ると、剝片の集中区と重なり、ここで剝片剝離作業が行われていたことが推察される(第9図)。図示した4点のうち、49は下層から出土したものである。

不定形石器(図版13・14~15~32) 出土点数が245点と多いので、代表的な18点のみ図示した。不定形石器は、器種の分類で剝片素材の定形石器(石鏃、石匙など)を除いたスクレイパーの類で、刃部の作出方法、刃部の位置・形態、素材形態など

D 錢 貨 (図版12-136~139)

近世の錢貨が4点出土した。136・137は裏面に文字のない新寛永通宝であろう。138は、明和5年(1768~)に鋳造された裏面に波線の入った明和四文銭(11銭)と考えられる。139は、幕末の文久3年(1863~)から鋳造された文久永宝である。136・137は、調査区北東に位置していた墓地部分からの出土で、埋納されていたものが墓地移転の時に掘り起こされて散乱したものと思われる。

第9表 土器観察表

縄文土器

番号	出土地点	時間	分類	部位	色調	胎 土	焼成	内面調整	器種	決定期	文様などの特色	備 考
1	J 5-12 II層	I	a	口縁	褐色	細砂 磷灰母	良	ミガキ	深鉢	口径25.0	有施紋縄文 内底無文 内面印文	
2	H 10-20 II層	I	a	口縁	褐色	細砂 斧面骨針	良	ミガキ	深鉢	口唇部を肥厚し刃口 幅の狭い沈縄文		
3	I 12-6 II層	I	a	胴	黒褐色	細砂 斧面骨針	良	ミガキ	深鉢	沿鉢底にとり 外面輪積み痕が残る	No4と同一	
4	H 10-20 II層	I	a	胴	にぶい褐色	細砂 石英 磷灰母	良	ミガキ	深鉢	刺突文 外面輪積み痕が残る	No3と同一	
5	H 5-7 II層	I	a	胴	にぶい褐色	細砂 白色粒子 磷母	普通	ナデ?	深鉢	横位隆起に沿って有施縄文		
6	カクニン	I	a	胴	暗褐色	細砂 多石英	普通	ミガキ	深鉢	沈縄文 点列文 縦筋雲母L R縄文	No7と同一 縄文	
7	I 10-2 II層	I	a	胴	暗褐色	細砂 多石英 磷母	普通	ミガキ	深鉢	沈縄文 点列文 L R縄文	No6と同一	
8	H 9-5 II層	I	b	口縁	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ミガキ	深鉢	横位半隆起縄文 織紋文複文 を三角形印刻 斧面区画網目位 半隆起縄文 木目状捺糸文		
9	D 8-16 II層	I	b	口縁	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子 黑母	良	ミガキ	深鉢	織文複文を逆三角形印刻 横 位平行半隆起縄文 備文		
10	I 11-19 II層	I	b	口縁	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ナデ?	深鉢	織縫文複文を三角形印刻 横 位半隆起縄文		
11	F 6-19 II層	I	b	口縁	褐色	粗砂 白色粒子	良	ミガキ	深鉢	横段半隆起縄文 R L縄文複 文を横位半隆起縄文		
12	H 8-8 II層	I	b	胴	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ナデ?	深鉢	横位平行半隆起縄文横位半隆 起縫文		
13	F 9-19 II層	I	b	胴	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ナデ?	深鉢	横位平行半隆起縫文		
14	F 10-25 II層	I	b	胴	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ナデ?	深鉢	爪形文 横位平行半隆起縫文		
15	I 9-13 II層	I	b	胴	黄褐色	粗砂	普通	ミガキ	深鉢	無文		
16	I 9-13 II層	I	b	胴	灰黄褐色	粗砂	普通	ミガキ	深鉢	木目状捺糸文		
17	H 8-14 II層	I	b	胴	灰黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ	深鉢	木目状捺糸文	No19と同一	
18	H 8-3 II層	I	b	胴	黄褐色	粗砂	普通	ミガキ	深鉢	木目状捺糸文		
19	H 8-9 II層	I	b	胴	灰黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ	深鉢	横位平行半隆起縫文 細紋	No17と同一	
20	I 9-9 II層	I	c	胴	褐色	粗砂 石英	普通	ナデ?	深鉢	箱内区画隆起帯 R L縄文		
21	G 9-1 II層	I	c	胴	黄褐色	細砂 白色粒子	普通	ナデ?	深鉢	Y字状区画隆起帯 区画内捺糸 文 R L縄文		
22	ハイト	I	c	胴	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ナデ?	深鉢	区画横位平行比縫文平行曲線 分 R L縄文内面コゲ付着		
23	チテソフメイ	I	c	胴	にぶい黄褐色	細砂 石英	普通	ミガキ	深鉢	区画横位平行比縫文平行曲線 分 R L縄文内面コゲ付着		
24	I 9-9 II層	I	c	口縁	にぶい褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	区画横位平行比縫文平行曲線 分 円形突起の縁に有 施化縫文 内部模様埋帯 R L縄文	No25・26と 同一	
25	I 9-9 II層	I	c	口縁	灰黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	区画隆起 嶺位平行半隆起縫 文	No24・25と 同一	

3 出土遺物

番号	出土地点	時期	分類	部位	色調	胎土	焼成	内面調整	器種	法則性	文様などの特色	備考
26	I 9-9	II層	I	c	胴	灰黄褐色	細砂 石英	普通	ミガキ	深鉢	横円形沈縫帯 円筒突起 半 隆起線文 有節沈縫文	No25・24と 同一
27	J 13-16	II層	I	d	口縁	褐色	細砂 石英	良	ナデ	深鉢	口縁上端がくの字に外反 横 位隆起+壁形状沈縫文	
28	F 4-23	II層	I	d	胴	にぶい橙色	細砂	良	ミガキ	深鉢	渦巻き状半隆起線文模様平行 半隆起線文RL織文 内面コ ゲ付着	
29	カクニン	I	d	胴	灰黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	有節沈縫文 RL織文		
30	J 7-9	II層	I	胴	黄褐色	細砂	普通	ナデ	深鉢	区画沈縫文+RL織文		
31	G 13-8	II層	I	口縁	灰黄褐色	細砂	良	ミガキ	深鉢	口径32.4 U字状区画沈縫文+RL織文 模様波状沈縫文		
32	I 7-16	II層	III	a	口縁	にぶい褐色	細砂多 石英	良	ミガキ	深鉢	口径24.8 弦状模様 区画模様+斜位平 行沈縫文+L織文 口縁がくの字内縫	
33	I 6-9	II層	III	a	胴	にぶい褐色	細砂多	普通	ミガキ	深鉢	区画模様平行沈縫文+LR織文	No34と同一 文
34	I 6-9	II層	III	a	胴	にぶい褐色	細砂多	普通	ミガキ	深鉢	区画模様平行沈縫文+LR織文	No33と同一 文
35	D 6-25	I層	III	a	胴	灰黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	模様沈縫文	
36	H 4-22	I層	III	b	口縁	褐灰色	細砂多	良	ミガキ	深鉢	口径21.0 区画模様平行沈縫文模様文+R 織文	
37	I 7-16	II層	III	b	口縁	褐灰色	細砂	普通	ナデ	深鉢	区画平行沈縫曲線文+RL織文	No41と同一 文
38	I 7-21	II層	III	b	口縁	褐灰色	細砂多 黑母	普通	ミガキ	深鉢	漩状口縁 沈縫曲線文+区画 模様沈縫曲線文+L R織文	
39	H 4-23	I層	III	b	口縁	灰黄褐色	細砂 白色粒子	普通	ミガキ	深鉢	平行沈縫区画模様文+L R織文	
40	I 6-1	II層	III	b	胴	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ナデ	深鉢	区画模様平行沈縫曲線文+L R織文	
41	H 7-5	II層	III	b	胴	にぶい黄褐色	細砂多	普通	ナデ	深鉢	区画模様平行沈縫曲線文+R L織文	No37と同一 文
42	J 8-6	II層	III	b	胴	褐灰色	細砂多	普通	ナデ	深鉢	くびれ外反 区画平行沈縫曲 線文+L R織文	
43	J 8-11	II層	III	b	胴	にぶい黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	区画平行沈縫曲線文+RL織文	
44	E 3-19	II層	III	c1	口縁	暗褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	口径11.5 小突起 区画模様平行沈縫文 +R L織文	
45	H 5-11	II層	III	c2	口縁	灰黄褐色	細砂多	普通	ナデ	深鉢	模様沈縫文	
46	ヒュウサイ	III	c2	口縁	褐灰色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	波状口縁 区画模様拉伸織文+ L R織文		
47	D 5-14	II層	III	c2	口縁	にぶい黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	区画模様沈縫文+L R織文	
48	D 6-17	II層	III	c2	口縁	灰黄褐色	細砂 白色粒子	普通	ミガキ	深鉢	波状口縁 区画模様拉伸織文+ L R織文	
49	H 5-2	II層	III	c2	口縁	浅黄褐色	細砂 石英	良	ミガキ	深鉢	波状口縁 区画模様拉伸織文+ L R織文	
50	H 4-2	I層	III	c2	口縁	灰黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	波状口縁 区画模様拉伸織文+ L R織文	
51	I 7-2	II層	III	c2	口縁	にぶい黄褐色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	区画模様平行沈縫文+L R織文	
52	H 4-21	II層	III	c2	口縁	にぶい黄褐色	細砂	良	ミガキ	深鉢	区画模様拉伸織文+L R織文	
53	E 3-19	II層	III	c2	口縁	にぶい黄褐色	細砂 白色粒子	普通	ミガキ	深鉢	区画模様拉伸織文+R L織文	
54	D 6-5	II層	III	c2	口縁	にぶい黄褐色	細砂 石英	普通	ミガキ	深鉢	波状口縁+突起 外面区画模 様位沈縫文 内面模様平行沈縫文 +盲孔+刻目	
55	I 5-11	II層	III	c2	口縁	褐灰色	細砂	普通	ミガキ	深鉢	口唇部削除 区画模様拉伸織文+ L R織文	
56	D 4-24	II層	III	c2	胴	灰黄褐色	細砂 石英	普通	ミガキ	深鉢	区画模様平行沈縫文+L R織文	
57	C 3-6	II層	III	c2	胴	灰黄褐色	細砂	良	ミガキ	深鉢	区画模様平行沈縫文+L R織文	

番号	出土地点	時間分類	部位	色調	胎土	焼成	内面調査	器種	古量回	文様などの特色	備考
58	H 4-13 II層	III	c2 脚	にぶい黄褐色	粗砂 石英	普通	ミガキ 深鉢			区画模倣平行沈線文+RL範文	
59	D 4-18 II層	III	c2 脚	灰黄褐色	粗砂	良	ミガキ 深鉢			区画模倣平行沈線文+LR範文	
60	F 6-24 II層	III	c1 脚	灰黄褐色	粗砂多	普通	ナダ 深鉢			区画模倣平行沈線文+点列文+L.R範文	
61	H 6-6 II層	III	c3 口縁	褐色	粗砂多 石英	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁+突起 区画模倣平行沈線文+LR範文	
62	D 4-24 II層	III	c4 口縁	褐灰色	粗砂 白色粒子	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁 波状刻印帶 帯区画模倣沈線文+LR範文	
63	D 4-24 II層	III	c5 口縁	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁+突起 横斜刻印帶	
64	D 4-24 II層	III	c6 口縁	にぶい褐色	粗砂多 石英	普通	ナダ 深鉢			波状口縁+耳突起LR範文+区画模倣+斜位平行沈線文	No65・66と同一
65	D 4-24 II層	III	c5 脚	にぶい褐色	粗砂多 白色粒子	普通	ナダ 深鉢			L範文+区画模倣+斜位平行沈線文	No64・66と同一
66	D 4-24 II層	III	c5 脚	にぶい褐色	粗砂多 白色粒子	普通	ナダ 深鉢			L範文+模倣+斜位+斜位平行沈線文	No64・65と同一
67	H 5-2 II層	III	c5 脚	灰黄褐色	粗砂多 石英	普通	ミガキ 深鉢			LR範文+区画模倣平行沈線文	
68	H 5-2 II層	III	d 口縁	褐灰色	粗砂 白色粒子	普通	ミガキ 深鉢			模倣平行沈線文	
69	D 4-24 II層	III	d 口縁	褐色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢			模倣平行沈線文	
70	H 4-22 II層	III	d 口縁	褐灰色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁 口唇部刻印	
71	H 5-7 II層	III	d 口縁	にぶい黄褐色	粗砂 白色粒子	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁 口縁に沿って沈線文	
72	H 7-2 II層	III	d 口縁	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢			波状口縁 口唇部刻印	
73	I 7-10 II層	III	e 口縁	灰黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			上半輪文 下半L範文	
74	D 4-19 II層	III	e 口縁	褐灰色	粗砂	良	ミガキ 深鉢	口径17.4		口唇部刻印 斜線文+点列文	
75	F 10-3 II層	III	e 口縁	浅黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			LR範文+幅の広い沈線文	No76・82・83と同一
76	F 9-22 II層	III	e 口縁	褐灰色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			LR範文+幅の広い沈線文	No75・82・83と同一
77	J 8-6 II層	III	e 口縁	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢			円孔 指環圧痕	
78	J 5-1 II層	III	e 口縁	にぶい黄褐色	粗砂多 石英	普通	ナダ 深鉢	口径10.6		区画模倣平行沈線文+紙位平行沈線文+文書書き沈線文+点列文+斜線状沈線文	
79	I 11-24 II層	III	e 口縁	灰白色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			陰帯+斜線文LR範文	
80	H 5-1 I層	III	e 脚	黑褐色	粗砂多 黑母	普通	ナダ 深鉢			区画模倣沈線文 条痕文	No81と同一
81	H 5-1 I層	III	e 脚	黑褐色	粗砂多 石英	普通	ナダ 深鉢			模倣沈線文+S字連續状文様	No80と同一
82	ハイ F	III	e 脚	にぶい黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			LR範文+幅の広い沈線文	No75・76・83と同一
83	E 10-2 II層	III	e 脚	にぶい黄褐色	粗砂多	普通	ミガキ 深鉢			LR範文+幅の広い沈線文	No75・76・82と同一
84	H 5-19 II層	III	e 脚	黑灰色	粗砂 白色粒子	良	ミガキ 深鉢			模倣沈線文具による連續支撑	
85	D 4-24 II層	III	e 脚	暗褐色	粗砂	良	ミガキ 深鉢			模倣沈線文	
86	E 3-3 II層	f 口縁	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ナダ 深鉢	口径30.0			LR範文	
87	H 5-5 II層	f 口縁	にぶい褐色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢	口径18.0			LR範文	
88	H 9-10 II層	f 口縁	灰白色	粗砂 石英	良	ナダ 深鉢	口径24.6			照承文	
89	H 5-14 II層	f 口縁	にぶい褐色	粗砂多	良	ミガキ 深鉢	口径19.0			LR範文	
90	D 4-2 II層	f 口縁	にぶい黄褐色	粗砂多	普通	ナダ 深鉢	口径32.8			LR範文	
91	I 10-2 II層	f 口縁	褐灰色	粗砂 白色粒子	良	ナダ 深鉢				LR範文	
92	H 5-25 II層	f 口縁	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ミガキ 深鉢				LR範文	
93	H 5-10 II層	f 口縁	灰黄褐色	粗砂	普通	ナダ 深鉢			模倣模倣条線文+紙位攝曲鉛行条線文		
94	I 13-3 II層	f 口縁	灰黄褐色	粗砂多	普通	ナダ 深鉢			LR範文		
95	D 2-24 II層	f 底	にぶい褐色	粗砂多	普通	ナダ 深鉢	底径12.0			LR範文	
96	H 4-12 II層	f 脚	灰黄褐色	粗砂 石英	普通	ミガキ 深鉢			羽状跳文	No97と同一	
97	H 4-8 II層	f 脚	褐灰色	粗砂 石英	普通	ミガキ 深鉢			羽状跳文	No96と同一	
98	H 5-10 II層	f 脚	にぶい黄褐色	粗砂	普通	ナダ 深鉢			模倣条線文		

3 出土遺物

番号	出土地点	時期	分類	部位	色調	胎土	焼成	内部調整	器種	計量値	文様などの特色	備考
99	H 5 - 5	II層	田	f	網	にぶい黄褐色	細砂	白色粒子	普通	ミガキ	深鉢	連續状線文
100	H 5 - 19	II層	田		復元	にぶい褐色	細砂	石英	良	ミガキ	鉢	口径13.0 底径7.0 高さ8.0
101	G 9 - 11	II層	田	口縁	にぶい黄褐色	細砂	石英	良	ミガキ	鉢	内面横位沈線文	
102	H 5 - 24	II層	田	口縁	淡黄色	細砂	白色粒子	良	ミガキ	鉢	内面横位平行沈線文	
103	I 5 - 11	II層	田	口縁	灰黃褐色	細砂	白色粒子	普通	ミガキ	鉢	口唇部刻目	
104	H 6 - 12	II層	田	復元	にぶい褐色	細砂		良	ミガキ	鉢	口径14.0 底径5.8	
105	H 4 - 22	II層	田	口縁	にぶい黄褐色	細砂	石英	普通	ミガキ	鉢	突起十列目 円孔	
106	D 5 - 25	II層	田	口縁	明赤褐色	粗砂多	白色粒子	普通	ナデ	鉢	円孔	
107	C 4 - 17	II層	田	口縁	灰黃褐色	細砂		普通	ナデ	鉢	撫子文?	
108	H 4 - 21	II層	田	口縁	にぶい黄褐色	細砂多		普通	ミガキ	鉢	口唇部刻目	
109	D 4 - 25	II層	田	口縁	にぶい黄褐色	細砂		良		浅鉢	内面口唇部隆起十列目列文 横位平行沈線文	
110	D 4 - 24	II層	田	口縁	にぶい黄褐色	細砂	白色粒子	普通		浅鉢	内面点列文横位隆起十列目列文 横位平行沈線文	
111	D 4 - 24	II層	田	網	にぶい黄褐色	細砂		普通		浅鉢	横位平行沈線文	
112	D 7 - 13	II層	田	復元	褐色	細砂		普通	ナデ	盤	口径6.7 底径6.7 高さ14.9	
113	H 4 - 22	II層	田	網	褐色	細砂		良	ミガキ	盤	区画横位平行沈線文+L R 縦文	
114	H 5 - 2	II層	田	底	褐色	細砂		良	ミガキ	盤	底径11.6	
115	H 5 - 24	II層	田	口縁	褐色	細砂多		普通	?	盤	横垂状文 点列文 斜位平行沈線文	
116	H 5 - 19	II層	田	口縁	褐灰色	細砂	白色粒子	良	ナデ	注口	口唇部刻目 横位平行沈線文 斜位平行沈線文	
117	H 4 - 24	II層	田	口縁	褐色	細砂		良	ミガキ	注口	口唇部刻目 横位平行沈線文 内面凸帯	
118	F11 - 6	II層	田	網	灰黃褐色	細砂	白色粒子	普通	ミガキ	注口	曲線文+L R 縦文	
119	D 5 - 3	II層	田	網	褐灰色	細砂		良	ミガキ	注口	区画平行沈線文+L R 縦文	
120	G 10 - 8	II層	IV	復元	褐色	粗砂		普通	ミガキ	深鉢	口径30.6 溝引返し口縁 黑字文	
121	J 11 - 23	II層	IV	口縁	灰黃褐色	細砂	雲母	良	ミガキ	浅鉢	ミガキ状施帯+浮鏡文	
122	F 6 - 15	II層	IV	口縁	にぶい褐色	細砂	石英	良	ミガキ	盤	口縁上端黒字文	
123	I 9 - 7	II層	IV	口縁	にぶい黄褐色	細砂		普通	ミガキ	深鉢	突起 斜位平行沈線文	
124	G 9 - 9	II層	IV	口縁	にぶい褐色	細砂		普通	ミガキ	鉢?	浮鏡文	
125	I 9 - 17	II層	IV	網	無施色	粗砂		普通	ミガキ	盤	金網文	
126	G 9 - 21	II層	IV	網	褐灰色	細砂		良	ミガキ	盤	金網文	
127	H 10 - 14	II層	田	底	にぶい黄褐色	細砂		普通	ナデ	深鉢	底径10.0 網代鉢	
128	I 5 - 10	II層	田	底	灰黃褐色	細砂多		普通	ミガキ	深鉢	底径11.0 網代鉢	
129	H 5 - 4	II層	田	底	にぶい褐色	細砂多		普通	ナデ	深鉢	底径6.0 木集鉢	
130	ハイト	III	底	にぶい黄褐色	細砂	白色粒子	普通	ミガキ	?	?	?	
131	チテンフメイ	III	底	灰黃褐色	細砂	石英	普通	ナデ	?	?	?	
132	F 9 - 14	II層	底	にぶい黄褐色	細砂	白色粒子	普通				ミニチュア	

須恵器

番号	出土地点	部位	跡強	色調	胎土	焼成	手法		備考
134	G3 - 13	II層	網	裏	灰 色	石英	小礫	良	
135	H5 - 22	II層	網	裏	青褐色	石英	良		

第10表 石器観察表

石 筋

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	状態	分類	備考
1	I 10-2 II層	2.10	1.21	0.41	0.80	流紋岩	タテ	完	四基性	
2	F 12-6 II層	2.04	1.29	0.38	0.78	頁岩	タテ	完	四基性	
3	I 9-12 II層	2.56	1.38	0.40	(0.82)	流紋岩	片脚欠	四基性	側面縫合状	
4	I 5-16 II層	2.84	1.66	0.44	1.31	流紋岩	タテ	完	四基性	
5	J 10-6 I層	3.18	1.52	0.53	1.66	鐵石英	タテ	完	四基性	
6	H 10-25 III層	2.40	1.30	0.43	0.81	流紋岩	タテ	保存	四基性	側面縫合状
7	I 9-18 II層	3.58	1.65	0.50	(2.25)	流紋岩	タテ	片脚欠	四基性	
8	E 9-20 II層	(3.11)	(1.85)	0.48	(2.61)	頁岩		先端欠	平	基部にピッカ付着
9	G 12-9 I層	3.78	1.52	0.72	2.44	鐵石英		完	有	基
10	I 13-2 III層	(2.63)	(0.93)	0.46	(1.05)	頁岩		先端欠	有	基

石 錐

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	状態	備考
11	D 4-24 II層	2.64	2.09	0.65	2.04	流紋岩	タテ	完	

石 剣

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	状態	備考
12	I 5-17 II層	4.58	7.36	1.23	33.58				ヨコ 完側面丁寧な二次加工
13	I 10-7 II層	8.44	5.45	1.14	39.38				ヨコ 完

楔形石器

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	状態	備考
14	G 5-7 II層	5.02	3.74	1.43	26.02	流紋岩	タテ	完	

不定形石器

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	打痕長(cm)	打痕幅(cm)	刃部長(cm)	石 材	素 材	備 考	
15	I 9-3 II層	5.59	4.46	0.84	29.64			1.59	0.80	3.16	緑色麻風岩	タテ		
16	H 5-23 II層	4.36	3.45	1.50	14.94					1.47	3.04 セソ ヒダリ2.04	流紋岩	ヨコ	完
17	H 5-1 II層	6.88	3.85	1.20	27.08			2.10	0.88	ソク 2.38 セソ 1.41	頁岩	タテ		
18	H 12-5 II層	6.52	4.40	0.88	28.92			3.07	0.87	4.01	頁岩	タテ		
19	I 5-2 II層	9.00	3.11	1.52	48.25					7.97	頁岩			
20	イチゴ75T II層	5.11	6.04	1.31	37.22			1.84	1.29	ヒダリ4.45	流紋岩	ヨコ		
21	I 9-6 II層	9.76	5.95	1.61	89.69			3.56	0.90	1.47 9.00 ヒダリ9.38	流紋岩	タテ		
22	C 3-5 II層	7.39	5.91	1.58	50.69					ヒダリ5.19	麻風岩	タテ		
23	H 12-22 V層	5.27	3.54	3.55	1.03						頁岩			
24	F 12-25 II層	6.68	5.34	1.52	58.99						玉 鑿			
25	タチソフメイ	2.41	1.81	1.06	5.07						玉 鑿			
26	H 6-1 II層	3.80	2.41	0.89	6.59					1.47 3.85	流紋岩	ヨコ		
27	J 8-23 II層	4.59	4.68	1.74	41.22					ヒダリ9.42	流紋岩			
28	J 9-10 II層	5.67	4.30	1.71	28.65					ヒダリ2.21 ヒダリ2.38 ヒダリ9.38	頁岩			
29	E 7-6 II層	9.00	7.31	1.73	88.76			6.47	1.36	1.47 6.51	緑色麻風岩	ヨコ		
30	F 9-17 I層	7.10	6.60	2.37	96.06					ヒダリ9.6.71	流紋岩	タテ		
31	タチソフメイ	8.09	4.93	2.06	79.22			3.38	1.32	1.47 7.12	流紋岩	ヨコ		
32	H 10-11 II層	8.76	6.54	2.47	145.69					1.47 7.68	緑色麻風岩			

打製石斧

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	素材	状態	分類	備考
33	E 14-8 I層	(10.58)	(10.83)	(2.98)	(380.16)	粘板岩	タテ	高部1/2以上欠損	錐形	円刃、両刃、自然面寸
34	F 14-2 II層	9.97	5.77	1.93	76.76	頁岩	ヨコ	完	錐形	圓刃、片刃
35	D 6-1 II層	10.8	5.15	2.37	95.35	流紋岩	ヨコ	完	錐形	圓刃、片刃、光沢無、摩耗痕
36	P 11-4 II層	(14.37)	10.05	2.21	(386.00)	流紋岩	ヨコ	高部2/3未溝欠損	錐形	底刃、片刃、基部低換刃再加工
37	H 4-16 II層	12.00	6.50	1.70	453.34	粘板岩	ヨコ	完	錐形	底刃、片刃
38	カクニ-30II層	14.40	6.36	2.91	282.26	粘板岩	ヨコ	社ぼ完	錐形	円刃、両刃、自然面寸
39	H 14-16 II層	(13.04)	(8.26)	(2.99)	(386.00)	粘板岩	タテ	刃部側欠損	錐形	

3 出土遺物

磨製石斧

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	状態	分類	備考
41	G 3 - ?	(3.82)	(4.47)	2.11	(28.74)	砂岩	基部斜欠損	円刃、両刃、丁寧なミガキ	
42	H12-12 II層	(8.79)	4.00	2.14	(145.15)		基部欠損	偏円刃、両刃	
43	H13-22 II層	(6.26)	(4.24)	(1.92)	(68.48)		刃部欠損		
44	I 6-13 II層	13.46	4.81	2.60	360.17	麻灰角礫岩	完	円刃、両刃	

磨石類

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	状態	分類	備考
45	夷探	13.94	7.24	3.71	433.45	安山岩	完	両面2カ所磨削	
46	夷探	13.94	7.24	3.71	433.45	安山岩	完	両面2カ所凹底	
47	D 6-5 III層	12.52	6.97	3.92	363.03	麻灰角礫岩	完	正2裏1の凹底	

石核

番号	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	業材	分類	備考
48	G 7-24 II層	7.08	8.71	3.08	171.25	泥灰岩		両板剥離	
49	G 3-11 IV層	8.64	8.75	2.43	183.08	頁岩		両板剥離	
50	G 7-23 II層	6.02	5.50	3.91	159.00	頁岩		両板剥離	
51	C 2 II層	4.92	5.61	4.15	140.21	泥灰岩			

第11表 錢貨觀察表

番号	出土地点	銘名	径(cm)	重量(g)	備考
136	C4-15カラソン	寛永通宝	2.52	2.71	新無背
137	C4-15カラソン	寛永通宝	2.42	3.22	新無背
138	D 2-18 II層	寛永通宝	2.77	4.44	背に11横あり
139	G15-6 II層	文久永宝	2.67	2.85	背に11横あり

第IV章 自然科学の分析

株式会社 古環境研究所

1 七堀道下遺跡の地質とテフラ

A はじめに

河岸段丘面上に位置する七堀道下遺跡の発掘調査では、縄文時代前期および中期の遺物包含層が検出された。そこで地質調査を実施し土層についての記載を行うとともに、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行ってすでに噴出年代が明らかにされている示標テフラの検出を行い、それらとの層位関係から遺物包含層の堆積年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、I-10坑、E-11坑、そしてG-14坑の3地点である。

B 土層の層序

1) I-10坑

ここでは、七堀道下遺跡の基本的な土層断面が認められた。本地点の土層は、下位より黄灰色土（層厚3cm以上、VII層）、暗褐色土（層厚12cm、VI層）、黒色土（層厚19cm、V層）、黄色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、海汰の良い灰色細砂層（層厚29cm、以上IV層）、暗褐色土（層厚19cm、III層）、黒褐色土（層厚17cm、II層）から構成されている。これらの土層のうち、V層からは縄文時代前期の石器が、またII層からは縄文時代中期の土器が各々検出されている（第10図）。

2) E-11坑

ここでは、下位より黄色シルト質砂層（層厚5cm以上）、黄色砂層（層厚14cm）、亜円碌混じり暗褐色砂質土（層厚16cm、碌の最大径97mm、VI層）、亜円碌混じり黒色土（層厚25cm、碌の最大径43mm、V層）、灰黄色シルト質砂層（層厚6cm、IV層）、暗褐色土（層厚11cm、III層）、黒褐色土（層厚22cm、II層）が認められた（第11図）。

3) G-14坑

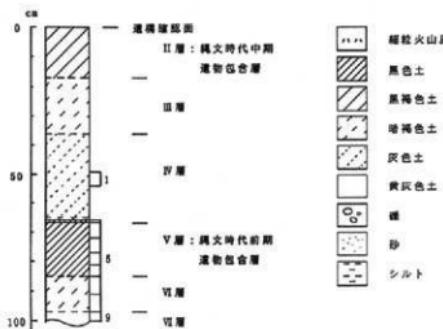
本地点では、黒色土（層厚21cm、V層）の上位に、下位より黄橙色シルト層（層厚0.2cm）、暗褐色土（層厚0.3cm）、黄色シルト質砂層（層厚12cm、以上IV層）が認められた（第12図）。

C テフラ検出分析

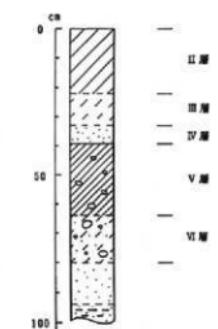
1) 分析試料と分析方法

I-10坑においてIV層以下の土層について、基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの6点を対象にテフラ検出分析を行い示標テフラの検出を試みた。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

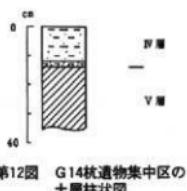
- ①試料10gを秤量。
- ②超音波洗浄装置により泥分を除去。
- ③80°Cで恒温乾燥。
- ④実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。



第10図 I-10坑の土層柱状図



第11図 E-11坑の土層柱状図



第12図 G-14坑遺物集中区の土層柱状図

2) 分析結果

分析結果を第12表に示す。試料番号2を除く全試料に透明で纖維束状に発泡した軽石型ガラスや平板状のいわゆるバブル型ガラスが認められた。とくに試料番号5からは、褐色のバブル型ガラスがごく少量ながら検出された。また試料番号2では、透明で纖維束状に発泡した軽石型ガラスや平板状のいわゆるバブル型ガラスが多く認められた。なお試料番号2については、褐鉄鉱の濃集層と考えられる。

D 層折率測定

1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象とした試料のうち、試料番号5を対象に位相差法（新井、1972）により屈折率測定を試みた。

2) 測定結果

火山ガラスの屈折率（n）の測定結果を、第13表に示す。その結果、1.498–1.505の値が得られた。ただしこの屈折率は、多く含まれる透明の火山ガラスの値であり、ごくわずかにしか検出されない褐色のバブル型ガラスの屈折率とは異なるものと思われる。

E 考 察

テフラ検出分析の結果、試料番号5（V層下部）に褐色のバブル型ガラスがごくわずかに検出された。屈折率の測定対象にはできなかったものの、この火山ガラスについては、その特徴から約6,300年前に南九州の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）に由来している可能性が考えられる。また試料番号1（IV層）の砂層については、層相や含まれる火山ガラスの特徴などから約5,000年前に会津地方の沼沢火山から噴出した沼沢1テフラ（Nm-1、只見川第四紀研究グループ、1966a、1966b、町田・新井、1992）の火碎流堆積物に由来する洪积堆積物に対比される。したがって、七堀道

下遺跡において縄文時代前期の石器（V層）はK-Ah層準あたりより上位から、また縄文時代中期の土器（II層）はNm-1起源の洪水堆積物の上位から検出されているものと考えられる。

試料	蛭石・スコリア			火山ガラス		
	黒	色	質	黒	形態	色
1	-	-	-	+++	pa>bw	透明
2	-	-	-	-	-	-
3	-	-	-	+	pa>bw	透明
5	-	-	-	+	pa>bw	透明、薄
7	-	-	-	+	pa>bw	透明
9	-	-	-	++	pa>bw	透明

+++ : とくに多い。++ : 多い。+ : 中程度。- : 少ない。- : 見められない。bw : バブル型。pa : 蛭石型。

第12表 七堀道下遺跡10坑におけるテフラ検出分析結果

D 小 結

七堀道下遺跡において地質調査およびテフラ検出分析を合わせて行った結果、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）に由来する可能性のある火山ガラス、また沼沢1テフラ（Nm-1、約5,000年前）の火砕流堆積物に由来する洪水堆積物が検出された。本遺跡では、縄文時代前期の石器（V層）がK-Ah層準付近より上位から、また縄文時代中期の土器（II層）がNm-1起源の洪水堆積物の上位から検出されているものと考えられた。

文献

- 新井房夫（1972）「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究—」『第四紀研究』11, p.254-269.
- 町田 洋・新井房夫（1978）「南九州鬼界カルデラから噴出した火山灰—アカホヤ火山灰」『第四紀研究』17, p.143-163p.
- 町田 洋・新井房夫（1992）『火山灰アトラス』東京大学出版会, 276p.
- 只見川第四紀研究グループ（1966a）「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代—日本の第四紀層の¹⁴C年代X X VI」『地理科学』82, p.8-9.
- 只見川第四紀研究グループ（1966b）「只見川・阿賀野川流域の第四紀編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について」『第四紀研究』8, p.76-79.

試料	火山ガラスの屈折率 (n)
5	1.498-1.505

測定は、位相差法（新井、1972）。
第13表 七堀道下遺跡10坑の屈折率測定結果

2 七堀道下遺跡の植物珪酸体分析

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO)が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出す方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山1987）。ここでは、遺跡周辺の古植生・古環境の推定を主目的として分析を行った。

B 試 料

調査地点は、I-10坑、E-11坑、G-14坑の3地点である。試料は、I-10坑で7点、E-11坑で1点、G-14坑で2点の計10点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

C 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- ①試料の絶乾(105°C・24時間)
- ②試料約1gを秤量、ガラスピース添加(直径約40μm、約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- ③電気炉灰化法による脱有機物処理
- ④超音波による分散(300W・42kHz・10分間)
- ⑤沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- ⑥封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- ⑦検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はスキの値を用いた。その値は8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

D 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表および第13図～第15図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、キビ族型、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、くさび型、Aタイプ、Bタイプ、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、タケア科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

検出密度（単位：×100個/g）	I-10坑							E-11坑			G-14坑		
	1	2	3	4	5	6	7	1	1	2			
イネ科													
キビ族（ヒエ属など）	8												
ヨシ属	8	8					7				103	15	15
ウシクサ族（ススキ属など）	8							15			32		7
牛尾草属	23							8	7	8			
ウシクサ族型	53	36	15	113	151	23	23				260	8	154
ウシクサ族型（大型）													15
くさび型							15						7
Aタイプ	15	8	15	30	7	8					55	23	22
Bタイプ		8	7										
タケア科													
クマザサ属型	23	15	82	323	337	326	262				418	53	389
未分類等	23	7	38	89	16	38		79	8	59			
その他のイネ科													
表皮毛起源	15	15	7	45	41	39	8				39	15	29
棒状珪酸体	158	31	22	205	592	287	85				584	30	654
未分類等	173	85	45	368	743	481	300				728	105	733
シダ類						7	8				8		7
（表面骨針）						83	89	23	92		8	22	
植物珪酸体類	483	231	210	1245	1975	1186	916				2304	257	2153

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）

キビ族（ヒエ属など）	0.63												
ヨシ属	0.48	0.48					0.43				6.47	0.95	0.93
ウシクサ族（ススキ属など）	0.09						0.19				0.39	0.09	
クマザサ属型	0.17	0.12	0.62	2.42	2.53	2.44	1.96				3.14	0.40	2.92

※試料の面積を1.0m²と仮定して算出。

第14表 植物珪酸体分析結果

〔シダ類〕

1) I-10坑（第13図）

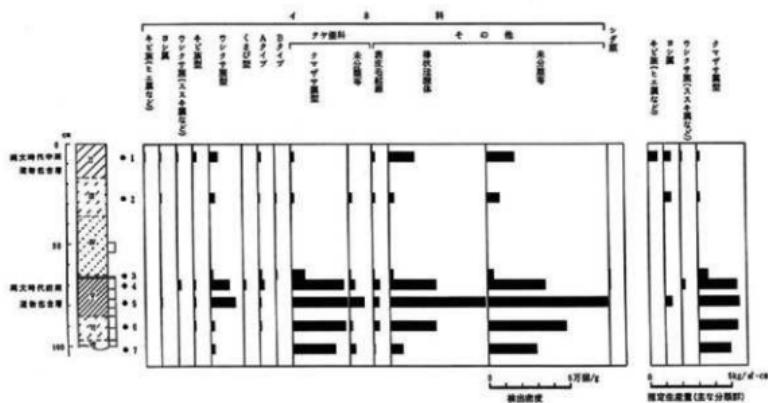
V層からII層までの層準について分析を行った。その結果、V層（試料7）およびVI層（試料6）では、クマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型なども検出された。V層（試料4、5）でもおおむね同様の結果であるが、同層ではウシクサ族型が増加しており、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属など）、シダ類なども検出された。II層（試料2）では、ヨシ属やウシクサ族型、クマザサ属型などが検出されたが、いずれも少量である。II層（試料1）でもおおむね同様の結果であるが、同層ではキビ族（ヒエ属など）やウシクサ族（ススキ属など）、キビ族型なども検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、V層より下位ではクマザサ属型が圧倒的に卓越していることが分かる。

2) E-11坑（第14図）

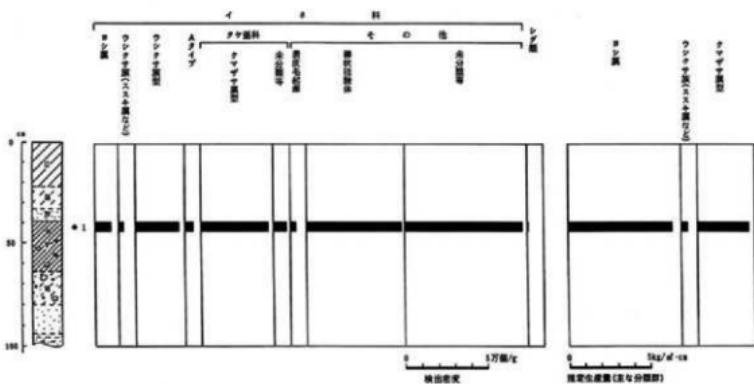
V層上部（試料1）について分析を行った。その結果、クマザサ属型やウシクサ族型、棒状珪酸体が多量に検出され、ヨシ属も比較的多く検出された。また、ウシクサ族（ススキ属など）やシダ類も検出された。おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、ヨシ属が圧倒的に卓越しており、次いでクマザサ属型が多くなっていることが分かる。

3) G-14坑（第15図）

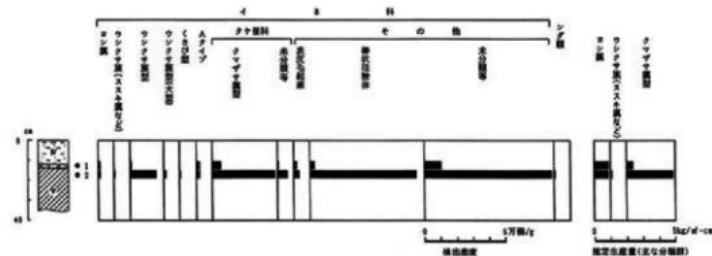
V層上部およびIV層底について分析を行った。その結果、V層上部（試料2）ではクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型も比較的多く検出された。また、ヨシ属やウシクサ族（ススキ



第13図 I-10杭の植物珪酸体分析結果



第14図 E-11杭の植物珪酸体分析結果



第15図 G-14杭の植物珪酸体分析結果

属など)、シダ類も検出された。IV層基底(試料1)でもほぼ同様の分類群が検出されたが、いずれも少量である。

おもな分類群の推定生産量(図の右側)によると、V層上部ではクマザサ属が圧倒的に卓越していることが分かる。

E 植物珪酸体分析からみた植生・環境

以上の結果から、七堀道下遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

VII層から縄文時代前期とされるV層までの堆積当時は、クマザサ属を主体とするイネ科植生が継続されていたものと推定される。クマザサ属には、チシマザサ節やチマキザサ節、スズタケ節、ミヤコザサ節などが含まれるが、植物珪酸体の形態からここで検出されたものは、その大部分がチシマザサ節およびチマキザサ節に由来するものと考えられる(杉山1987)。これらの植物は現在でも日本海側の寒冷地などに広く分布しており、積雪に対する適応性が高いとされている(室井1960)。また、クマザサ属は常綠性であり、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカの重要な食物となっている(高橋1992)。

縄文時代前期とされるV層では、クマザサ属以外にもヨシ属やススキ属、シダ類などが見られ、とくにE-11坑付近はヨシ属が多く生育する湿地的な環境であったものと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ヨシ属やススキ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

その後、沼沢1テラフ(Nm-1、約5,000年前)起源の洪水堆積物であるIV層の堆積によって、当時の植生は一時的に破壊されたと考えられるが、III層の時期にはヨシ属やクマザサ属などが見られるようになり、縄文時代中期とされるII層の時期にはキビ族やススキ属なども生育していたものと推定される。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイスビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか1988)。また、密度も800個/gと低い値であることから、同層でヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イスビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

参考文献

- 杉山真二(1987)「遺跡調査におけるプランクトン・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第2号:p.27-37
 杉山真二(1987)「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号:p.70-83.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—」『考古学と自然科学』20:p.81-92.
 高橋成紀(1992)『北に生きるシカたち—シカ、ササそして雪をめぐる生態学—』どうぶつ社.
 藤原宏志(1976)「プランクトン・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9:p.15-29.
 藤原宏志(1979)「プランクトン・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—」『考古学と自然科学』12:p.29-41.
 室井博(1960)「竹籠の生態を中心とした分布」『富士竹類植物園報告』5:p.103-121.

第V章 まとめ

本遺跡は、常陸川右岸の河岸段丘上に位置し、繩文時代前期以前・中期～晩期までの遺物が濃密ではないが認められ、その中で最も営まれた時期が後期である。以下に、検出された遺構と出土遺物についてまとめる。

1 検出された遺構について

遺構は、沼沢火山灰層を間層に上下から検出されているが、遺構数は概して少ない。上層から検出された遺構は土坑・ピット19基・焼土1基・集石3基で、検出面は焼土がⅡ層中で検出されたのを除いて、土坑・ピット・集石はⅢ層上面である。土坑・ピットは、散在的な分布で、出土遺物もなく性格・所轄時期ともに明らかにできない。焼土は1基が検出されたにすぎないが、検出地点が繩文時代後期前葉～後期中葉の土器群と重なり、この時期の所産と考えられる。集石は、調査区北端に分布している。被熱の痕跡が残る砾を含むものは1号集石だけで、3号集石は碎石された砾が集石されているもので、4号集石は大小の砾が散在しているものである。これらの集石の年代については出土遺物の集中域からはずれた地点から検出されているので特定できない。1号集石のような被熱をしている集石は、本遺跡のような集落跡でない遺物散布的な繩文時代の遺跡でもよく検出される遺構で、同じように周辺の三川村上ノ平遺跡A地点・津川町大坂上道遺跡・津川町中附遺跡などでも検出され、滝沢氏が指摘するように「居住域から離れた場所に構築され、非日常的な遺構」〔滝沢1994〕といえる。

下層から検出された遺構は土坑2基・集石1基と少なく、出土遺物も石器が少量で主体的とはならない。常陸川を挟んで対岸に位置する上川村北野遺跡で沼沢火山灰が堆積する前に繩文時代前期末の集落が営まれていたこととは対照的である。なお、下層の遺構・遺物の年代推定であるが、火山灰分析結果によると鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約6,300年前）がⅣ層上面で検出された遺構・遺物よりも下位に層準推定されている。

2 繩文時代の土器について

繩文時代の土器は、中期～晩期までの認められ、I～IV群に分けて記述した。この中で最も出土量が多いのが第III章で報告したように後期に属するⅢ群土器である。下層から土器は出土しなかった。以下に各時期ごとにまとめ、本遺跡の土器様相について考えたい。

繩文時代中期前葉が主体のI群土器の出土数量はⅢ群土器に次いで多い。I群a類は、関東の阿玉台式系の土器としたものである。阿玉台式の土器は会津地方において、大木式の土器に混じって認められているが、本遺跡の位置する津川盆地周辺でも津川町大坂上道遺跡〔滝沢1994〕などで同様に認められるところとなっている。本遺跡で出土したものは、1が阿玉台I a式に、5が隆帶に沿って有節沈線文が施されているのでI b式に位置づけられる。2～4のような外面に輪積み痕が残る土器は、阿玉台式の土器に伴なって見られる。I群b類とした北陸系土器は、口縁部に三角形印刻が施されたものが多く、調節片に至っては撚糸文が施されたものだけであることから、加藤氏の分類〔加藤1994〕を参考にすると新保式Ⅲ・IVに位置づけられるものであろう。I群c類とした東北系の土器は、大木7 b～8 a式併行のものが認められたが、本遺跡でc類の占める割合は低い。

縄文時代中期末としたIII群土器は、最も出土量が少ない。出土した土器は、大木10式に比定されるものである。

III群とした縄文時代後期の土器は、量的に最も多く本遺跡の主体となる。出土分布は、H5区とD4区で多量に出土した。時期は、堀之内2式～加曾利B1式併行期に比定されるものが多いが、少量前段階の在地系の南三十稻葉式が認められた。深鉢は堀之内2式に見られる横位沈線を縱位沈線で区切る文様を施すものも認められず、III群c類とした横位平行沈線文の認識に問題を残す。そのような中に、堀之内2式併行に比定されるIII群b類としたものや112のような壺が認められ、加曾利B1式併行期では、74のような深鉢は加曾利B1式併行に認められもので、類似するものは柏崎市刈羽大平遺跡〔柏崎市教委1985〕・長野県石神遺跡〔小諸市教委1995〕などで認められ、加曾利B1式に多い内面に文様を施す浅鉢も少量出土している。

III群とした縄文時代晩期の土器は、量的には多くない。時期は大洞A式併行に比定されるものであるが、その中で粗製土器は外側が撫糸文施文と条痕文施文が認められ、一般に撫糸文から条痕文施文へという変遷があり細分されている〔山内1984〕。

3 石器について

石器は上層だけでなく、下層からも出土した。上層出土の石器組成は、石礫・石錐・石匙・楔形石器・不定形石器・打製石斧・磨製石斧・磨石類があり、量的に少ないとされるが一般的に縄文時代の遺跡で認められる器種が存在する。使用石材は、剝片も含めてかなりの割合を流紋岩が占めている。下層の石器は本遺跡で主体をしめるものではなく少量であるが、使用石材は上層と同様に流紋岩が多い。津川盆地の縄文時代の遺跡は石器の出土量が多く、石材も比較的に頁岩・緑色凝灰岩・凝灰岩・流紋岩・鉄石英など多種類に及ぶ実際にデーターを収集してはいないが、遺跡の立地によって主体を占める石材にある程度の傾向があるのではないかと思われる。

4 結 び

本遺跡は各期を通じて拠点的集落となり得ないが、前期に始り、中期前葉にある程度の盛期が見られ、一時途絶えた後、後期前葉から中葉にかけて本遺跡の最盛期を迎える。その後、晩期の土器が少量認められる(第16表)。中期前葉と後期前葉に変化が見て取れる。こうした傾向は、津川町大坂上遺跡と同様であり、土器群の内容でも本遺跡と同様の変化が見られる。本遺跡が所在する津川盆地は、阿賀野川ルートを通じて中期前葉に関東系(阿玉台式)・東北系(大木式)・北陸系(新保・新崎式)の土器がそれぞれ定量流入し、後期前葉には堀之内2式・加曾利B1式土器の拡散にあわせて土器が流入し遺跡も増加する。本遺跡もこのような動向を受けて形成された遺跡の一つといえる。

草創期	早期	前期	中期	後期	晚期
.....	?	□	□

第16表 七堀道下遺跡の消長

要 約

- 1 七塙道下遺跡は、東浦原郡上川村大字九島字七塙道下322ほかに所在する。遺跡は北流する常浪川によって形成された右岸段丘上に位置し、標高は約75mである。現状は畠・荒蕪地であった。
- 2 発掘調査は磐越自動車道の建設に伴って、平成6・7年度に実施した。調査範囲は上川バーティングエリア予定地内で、調査面積は7,300m²である。
- 3 調査の結果、会津沼沢火山に由来する洪水平積火山灰層を間層に二枚の遺物包含層が確認された。火山灰層の上層からは時期不明の遺構と縄文時代中期～晚期までの遺物が検出された。火山灰層の下層からは縄文時代前期末葉以前の所産の遺構・遺物が認められたが、極めて少ない。その中で、縄文時代後期の遺物が主体をしめる。
- 4 検出された遺構は上層で土坑・ピット19基、集石3基、焼土1基、下層で土坑2基、集石1基である。土坑は、出土遺物がなくすべて時期・性格とも不明である。
- 5 上層から出土した遺物には縄文土器・石器が多く、その他に少量の土製品・須恵器・錢貨がある。下層から出土した遺物は石器(18点)のみである。
- 6 縄文時代の土器は中期～晚期のものが認められた。中期の土器は、前葉のものと(I群)、末葉のもの(II群)がある。前者は関東の阿玉台式系(a類)、北陸の新保・新崎式系(b類)、東北の大木式系(c類)の土器が認められた。各類の個体数は少ないが、福島県境に近いこの地域の土器の様相をある程度示すものであろう。後期の土器(III群)は堀之内2式～加曾利B1式併行期のものが多く、本遺跡の主体となる一群である。
- 7 上層から出土した石器(剝片も含む)は1822点である。その中で、石鏃、石錐、楔形石器、不定形石器、三脚石器、打製石斧、磨製石斧、磨石類などの器種が出土した。不定形石器を除けば、卓越した器種は認められなかった。使用石材は、粗粒な流紋岩が主体を占める。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1988「加曾利B様土器の変遷と年代（上）」『東京考古』第6号
- 石井 寛 1990『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書』山田大塚遺跡 横浜市埋蔵文化財センター
- 石川日出志ほか 1992『新潟県安田町文化財調査報告12 六野瀬遺跡1990年調査報告書 立川ブラインド工業株式会社東日本工場増設に伴う新潟県北蒲原郡安田町六野瀬遺跡発掘調査報告書』安田町教育委員会
- 石川日出志 1980「IVまとめ 1 土器について」『鳥居遺跡I』豊栄市教育委員会
- 小野 昭ほか 1986『人ヶ谷岩陰遺跡（第一次発掘調査概要）』上川村教育委員会
- 大坂 達郎 1983「縄文時代後期加曾利B式土器の研究（1）—最近の成果の検討と新たなる分析—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要第2号』東京大学文学部考古学研究室
- 柏崎市史編さん委員会 1987『柏崎市史資料集 考古篇1』
- 加藤三千雄 1988『新保・新崎式土器様式』『縄文土器大観3 中期II』小学館
- 加藤三千雄 1995「北陸における中期前葉の土器群について—新保・新崎式土器—」『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 川村三千男ほか1995『奥三面ダム開削遺跡発掘調査報告書IV 元屋敷遺跡I』新潟県朝日村教育委員会
- 日下部善己ほか1988『第8章第1節 土器』『福島県立博物館調査報告第17集 三貴地貝塚』福島県立博物館
- 國島 悪 1990『第II章第7節 後期の土器』『柏崎市史 上巻』柏崎市史編さん委員会
- 小林 謙一 1994「大宮台地周辺における阿玉台式土器成立期の土器様相」『土曜考古 第18号』土曜考古学研究会
- 小林 謙一 1995『南関東地方の五領ヶ台式土器群』『第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 坂井秀弥ほか 1989『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新幹線バイパス関係発掘調査報告書 山三賀II遺跡』新潟県教育委員会・建設省新潟国道事務所
- 佐々木藤雄ほか1984『帷子峯遺跡—横浜新道三ツ沢ジャンクション建設予定地区遺跡発掘調査報告書—』横浜新道三ツ沢ジャンクション遺跡調査会
- 沢田 敦ほか 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 着越自動車道関係発掘調査報告書 上ノ平遺跡A地点』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化調査事業団
- 品田 高志 1985「III刈羽大平遺跡 4 縄文時代B遺物(1)土器」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 刈羽大平・小丸山』柏崎市教育委員会
- 品田 高志 1991「新潟県の概要—稻作受容期の土器様相」『第1回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容期—第III分冊 甲信越・北陸・東海地方』東日本埋蔵文化研究会
- 品田 高志 1996「新潟県における縄文時代後期中葉の土器群—三仏生式土器とその様相の把握に向けて—」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 鈴鹿 良一・村木 亨 1984「第3章考察 第1節遺物について」『福島県文化財調査報告書第128集 真野ダム開道遺跡発掘調査報告V 上ノ台A遺跡（第1次）・宮前遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 鈴木 保彦 1972『東正院遺跡 神奈川県鎌倉市閑谷所在の縄文時代遺跡について』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団
- 高橋 保ほか 1990「B土器各説」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 間越自動車道関係発掘調査報告書 清水上遺跡』新潟県教育委員会

- 高橋 保・高橋雄雄 1992『新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
- 滝沢規朗ほか 1995『第V章 大坂上道遺跡』『新潟県埋蔵文化財調査報告書第68集 菅越自動車道関係発掘調査報告書 大坂上道遺跡・菅原遺跡・中畠遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 竹尾 進 1994『3遺物 4)銭貨』『東京都埋蔵文化財センター調査報告書 第17集 丸の内三丁目遺跡一 東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺跡の調査— 第2分冊』(財)東京都 教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター・東京都生活文化局
- 谷井 勉 1991『阿玉台式土器様式』『縄文土器大観2 中期』小学館
- 寺崎 裕助 1981『第2節2. 縄文後期の遺物』『埋蔵文化財発掘調査報告書 岩野原遺跡』長岡市教育委員会
- 寺崎 裕助 1995『新潟県における中期初頭の土器—関東、中部高地系土器を中心として—』『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 東京都教育委員会 1991『お江戸八百八町地下探検 東京の遺跡展』
- 長岡市 1992『長岡市史 資料編1 古考』
- 奈良 貴史 1988『銭貨』『増上寺子院群 光学院・貞松院跡・源興院跡一港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書—』東京都港区教育委員会
- 西川 泰民 1991『堀之内・加曾利B式土器様式』『縄文土器大観4 後期・晩期』小学館
- 丹羽 茂 1989『中期大木式土器様式』『縄文土器大観1 草創期・早期・前期』小学館
- 芳賀英一ほか 1994『福島県文化財調査報告書第296集 東北横断自動車道遺跡調査報告25 六郎次遺跡・塙喰岩陰遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
- 原雅信ほか 1991『坂下井二本松遺跡・下江田前遺跡 一般国道17号線(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』建設省・群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 原田 昌幸 1985『阿玉台式土器前半期の一様相—常磐道柏地区の調査成果から—』『研究紀要10-10周年記念論集一』
- 原田 昌幸 1986『第2部縄文時代 第2章聖人塚遺跡 B出土遺物土器』『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV一元割・聖人塚・中山新田I一』日本道路公団東京第一建設局・(財)千葉県文化財センター
- 原田 昌幸 1986『第2部縄文時代 第3章中山新田I遺跡 B出土遺物土器』『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V一元割・聖人塚・中山新田I一』日本道路公団東京第一建設局・(財)千葉県文化財センター
- 福島 雅義 1991『第1節 縄文時代中期末葉の土器群』『福島県文化財調査報告書第254集 三春ダム関連遺跡発掘調査報告書4 仲平遺跡(第3次)』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局
- 福島 雅義 1989『第5節 縄文時代後期前半の土器』『福島県文化財調査報告書第217集 三春ダム関連遺跡発掘調査報告書2 柴原A遺跡(第1次)・折ノ内遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局
- 藤巻 正信ほか 1991『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 関越自動車道関係発掘調査報告書 城之腰遺跡』新潟県教育委員会
- 古川 知明 1982『角神遺跡採集の石器九例』『新潟県史研究』12 新潟県
- 本間 宏 1996『福島県における縄文後期中葉の土器群』『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会

- 巻 町 1994『巻町史 資料編1 考古』
- 松本 茂ほか 1991『福島県文化財調査報告書第243集 東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 百瀬 長秀 1996『長野県の様相』『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 山内 幹夫 1984『福島県文化財調査報告書第132集 国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告16 一斗内遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 山内 幹夫 1985『第9節3出土遺物 織文土器』『国営総合農地開発事業 母畑地区遺跡発掘調査報告19 荒小路遺跡、地蔵田A遺跡』 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
- 米沢 義光 1986『第4章出土遺物 第1節縄文時代の遺物』『鹿島町徳前C遺跡調査報告(II・III) 国道159号線改築事業に係る石川県鹿島郡鹿島町徳前C遺跡第2・3次緊急調査報告』 石川県立埋蔵文化財センター
- 領塚 正浩 1992『第2章第2節 堀之内貝塚出土の堀之内式土器』『市立市川考古博物館研究調査報告 第5冊 堀之内貝塚資料図譜』 市立市川考古博物館
- 和田 寿久ほか 1990『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ 下ソリ遺跡』 新潟県朝日村教育委員会

図 版

凡 例

- 1 ここに遺構・遺物の実測図と写真をおさめた。
- 2 遺構・遺物実測図の縮尺は各図版に示した。
- 3 土器で断面が黒ぬりになっているものは須恵器である。
- 4 石器・土製品に観察される磨痕・節理面を以下の網目で表現した。

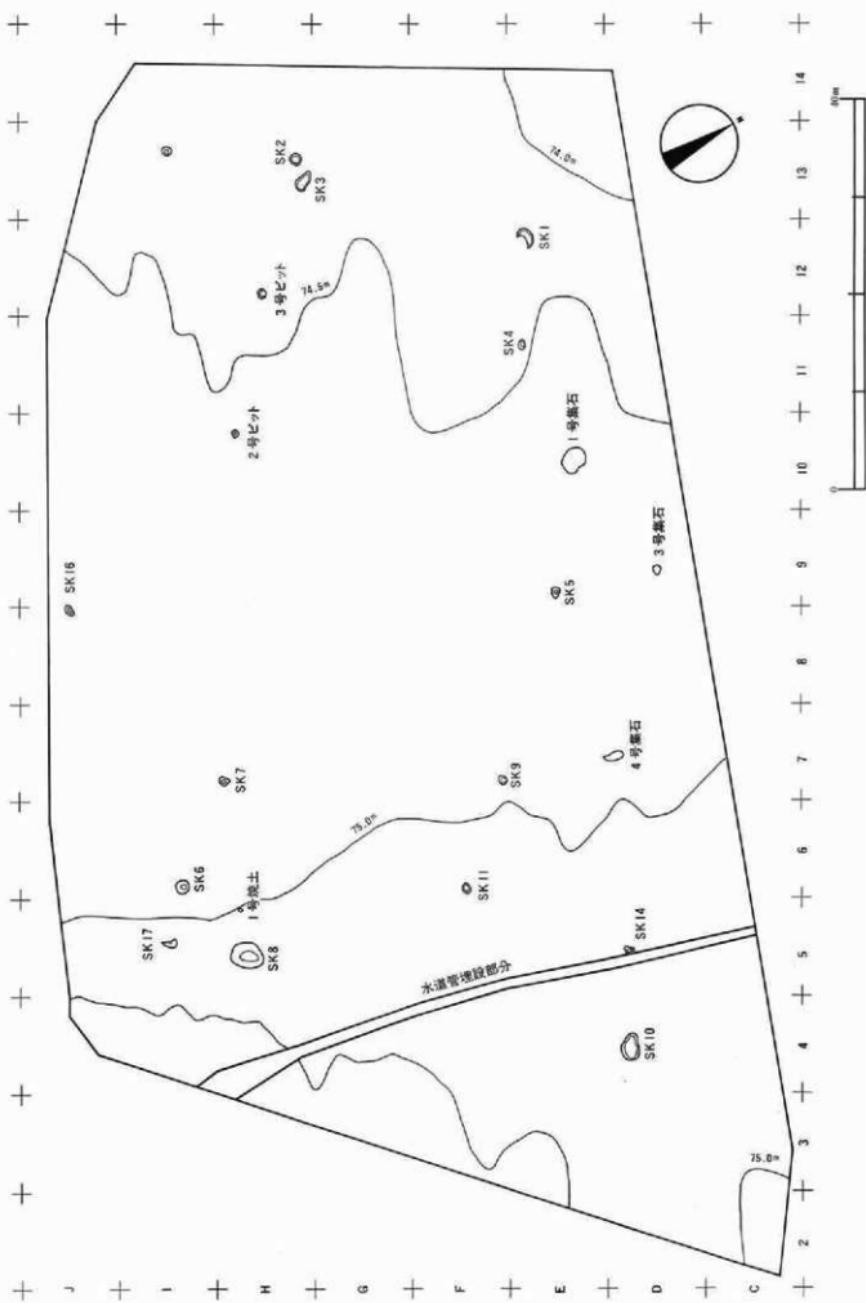


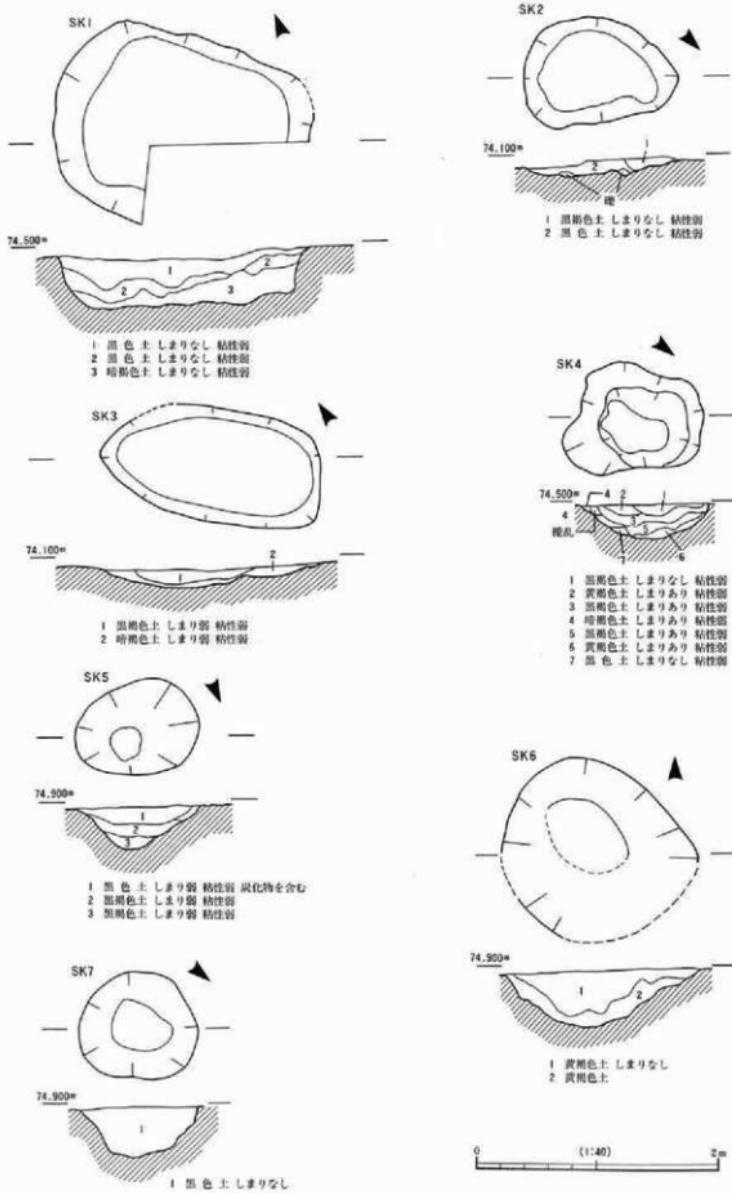
磨痕

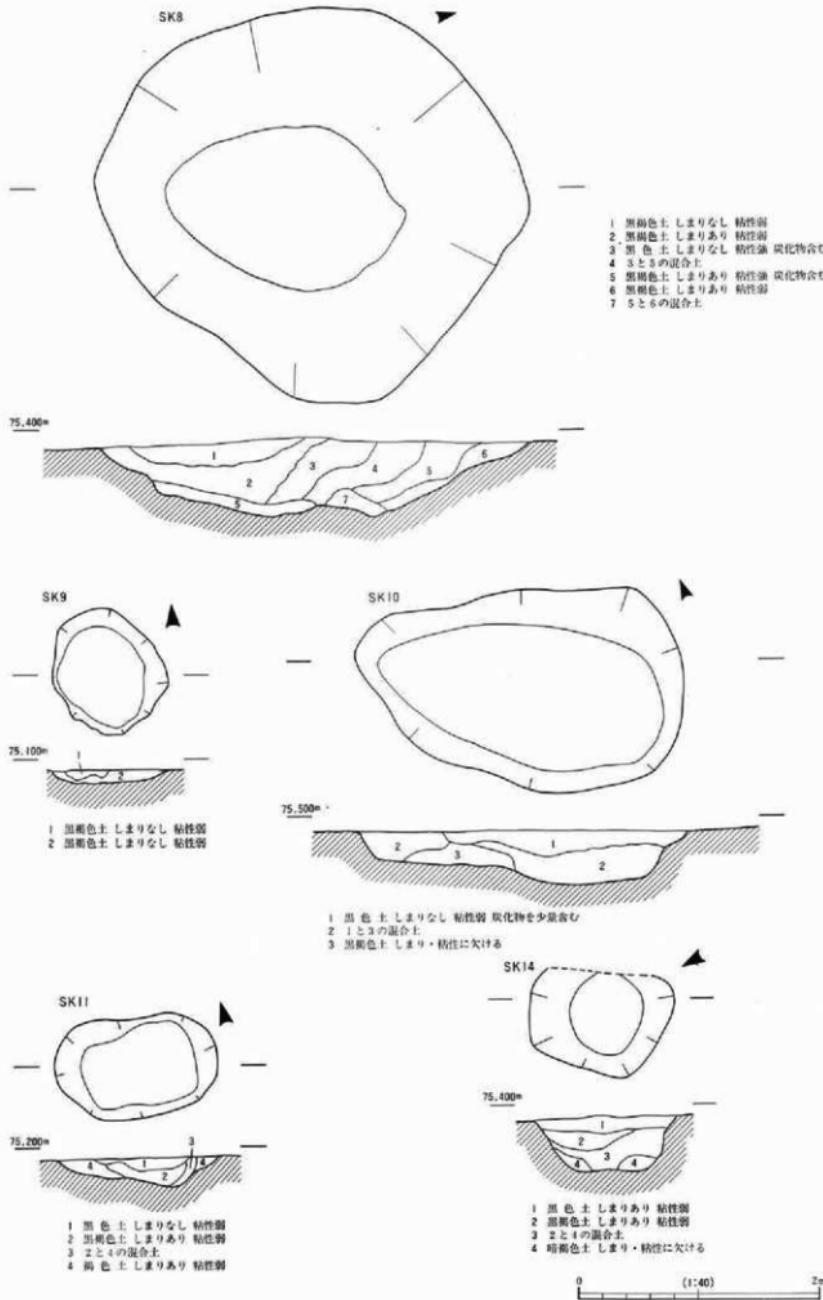


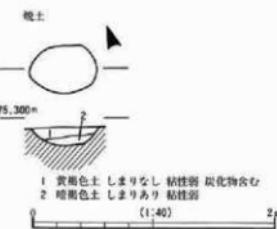
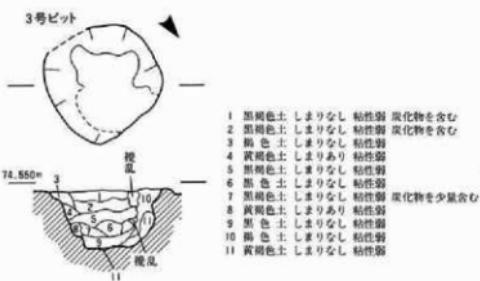
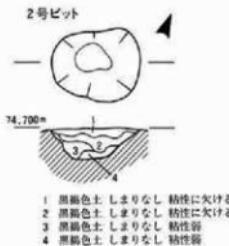
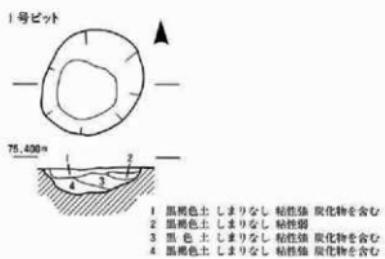
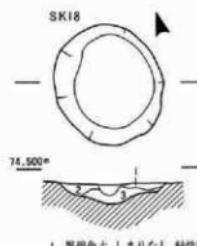
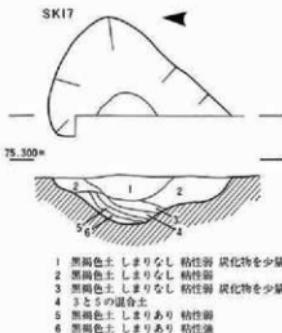
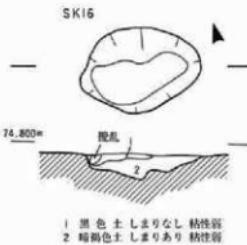
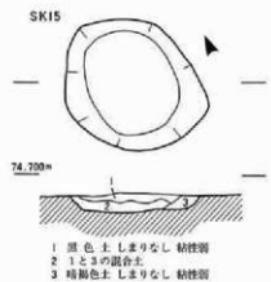
節理面







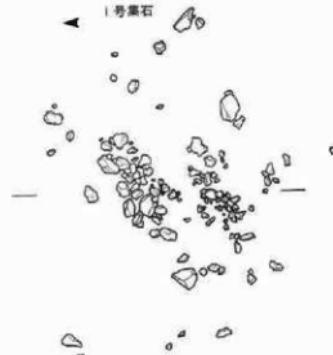




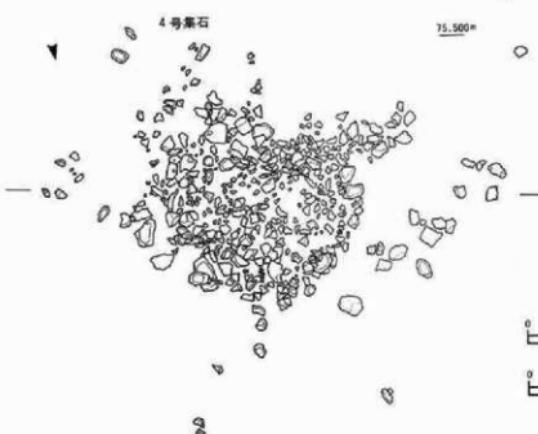
2号集石



1号集石



4号集石



(1:40) 1~4号集石

(1:20) (1:20) 土器出土状况

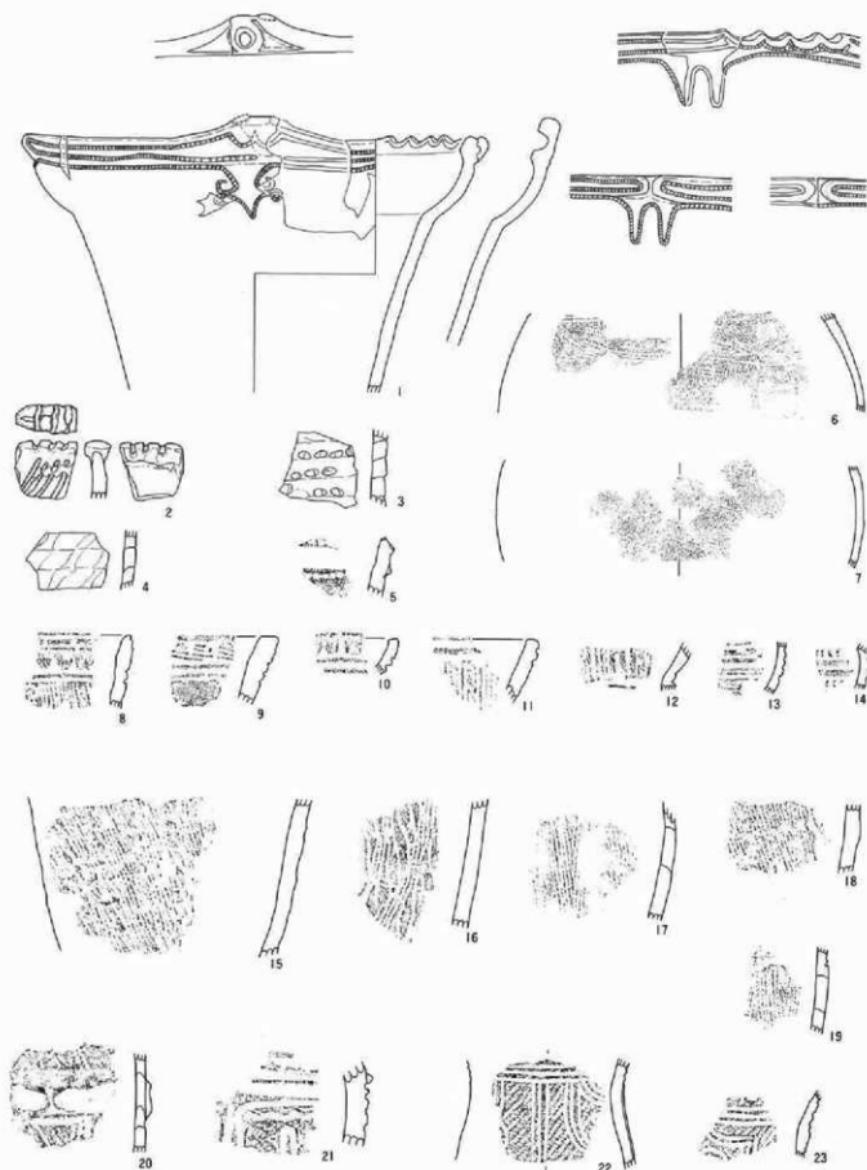
3号集石



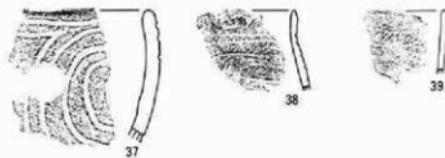
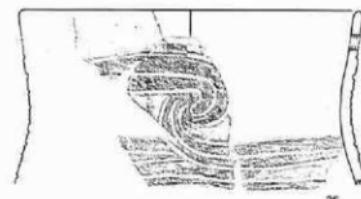
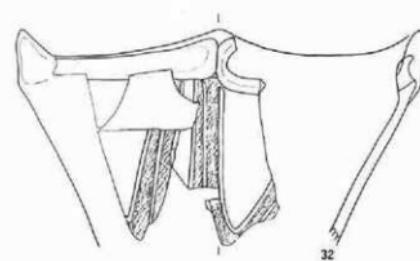
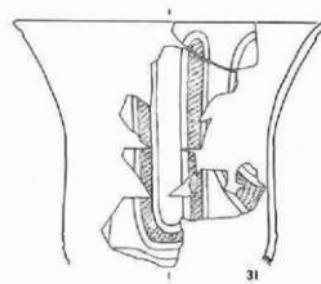
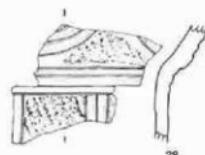
(1:20) 土器出土状况



75.100m



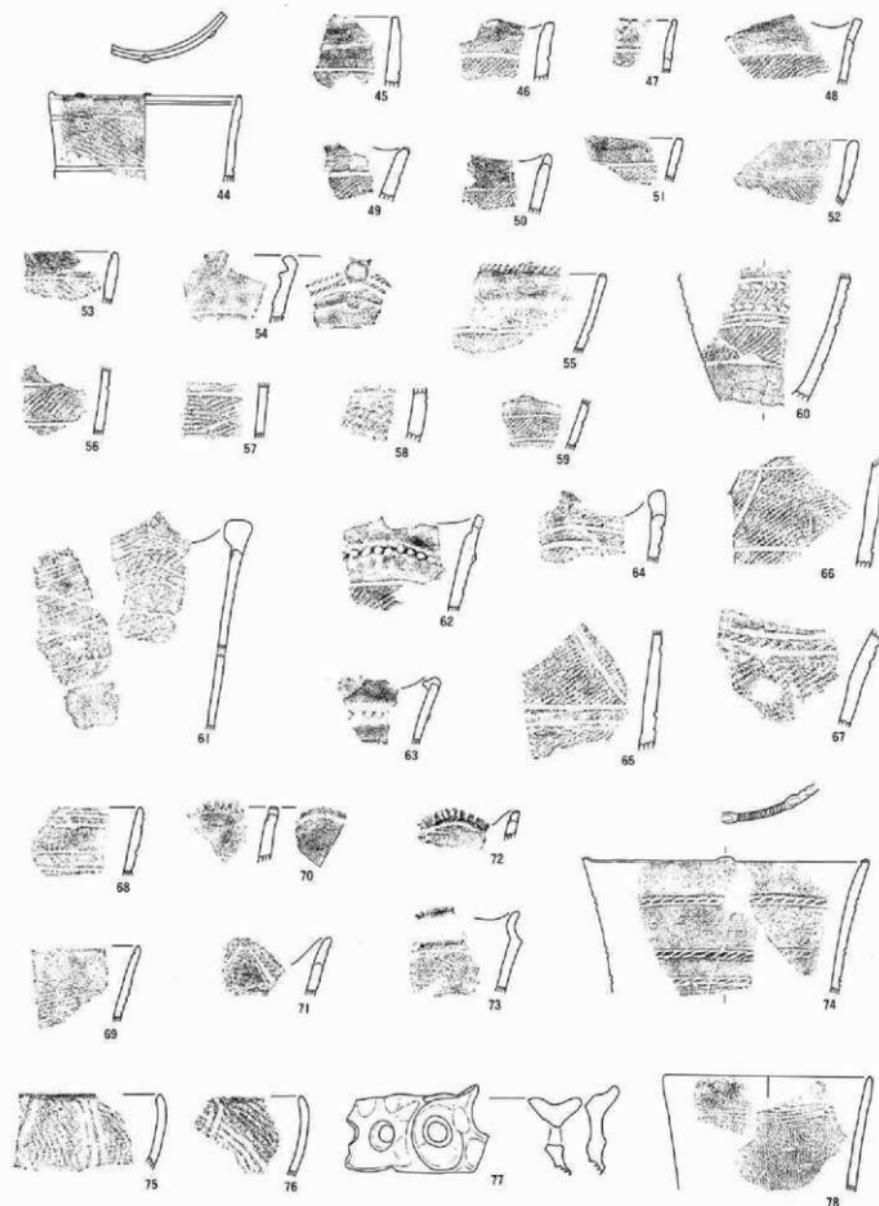
0 (1:3) 10cm

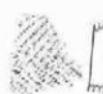
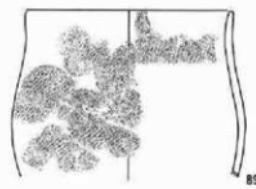
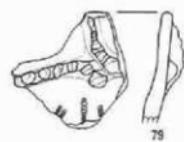


0 (1:3) 23-27, 29-43 10cm

0 (1:5) 3 10cm

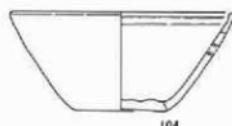
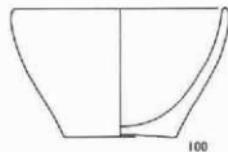




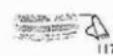
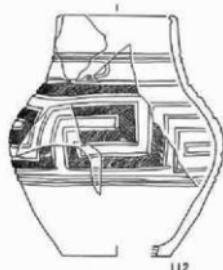


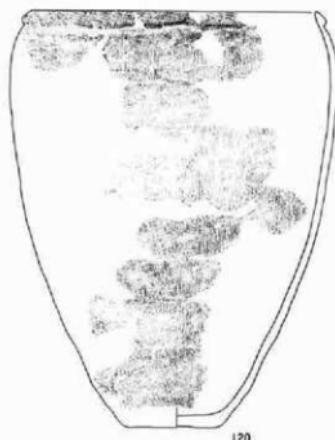
79-85-81-94-96-99
0 (1:3) 10cm

96-90-95
0 (1:5) 10cm



108





120



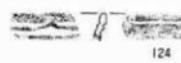
121



122



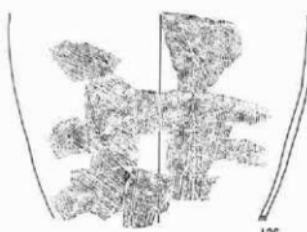
123



124



125



126



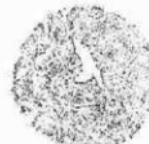
127



128



129



132



133



134



135



136



137



138

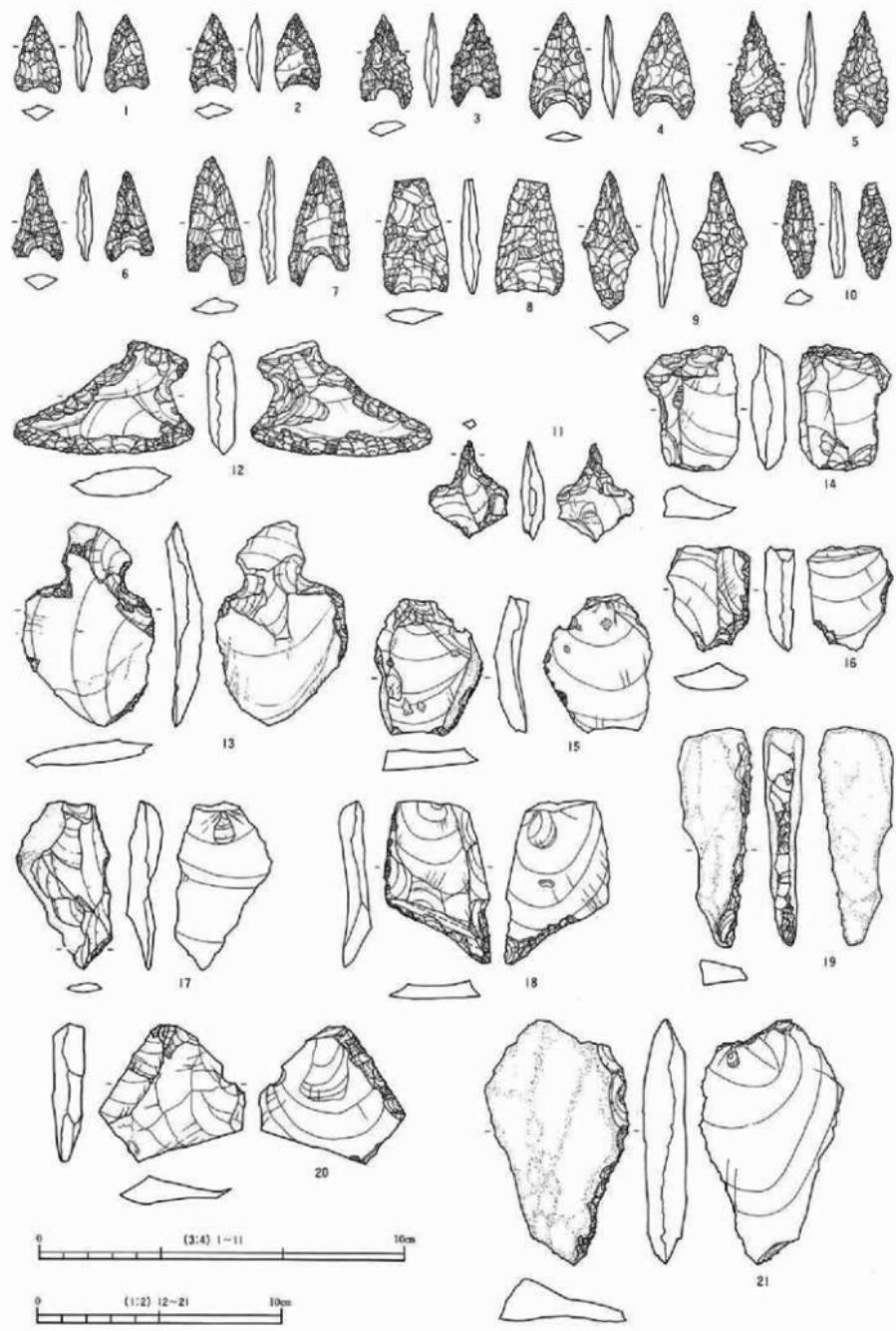


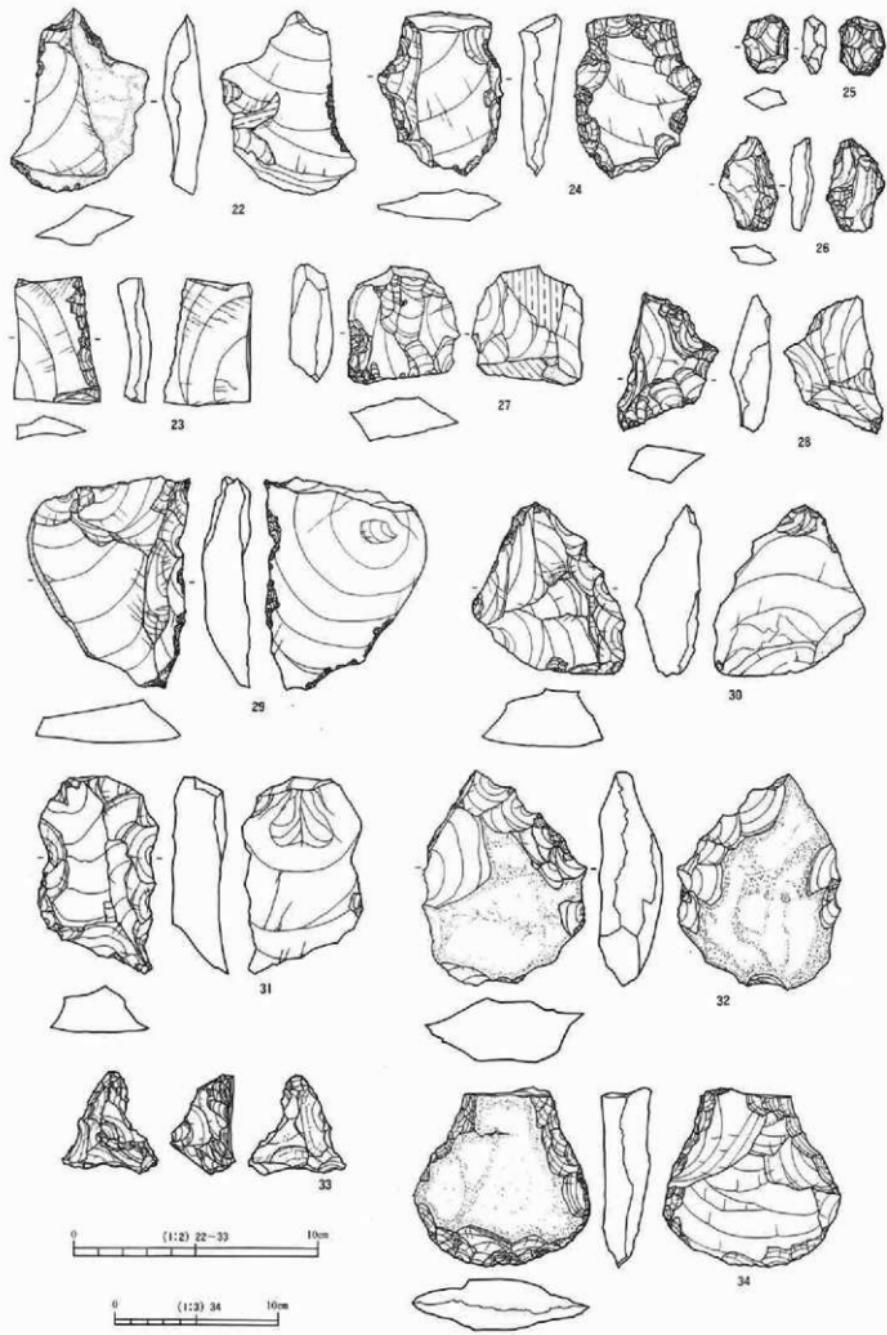
139

0 (1:3) 133-136-139 5cm

0 (1:3) 121-125-127-132-134-135 10cm

0 (1:5) 120-126 10cm

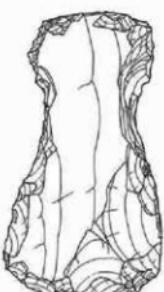
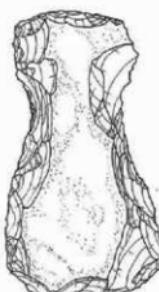






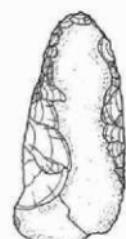
35

37



36

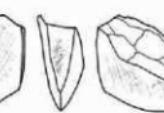
38



40



39



43



42



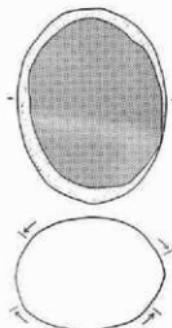
41

0 (1:2) 35-36-41-43 10cm

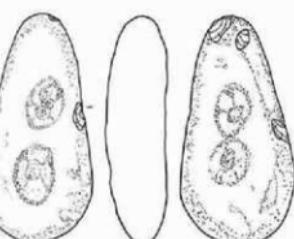
0 (1:3) 37-40 10cm



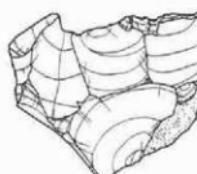
44



45



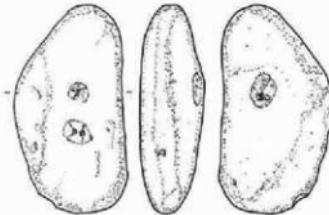
46



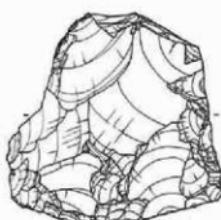
47



49



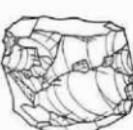
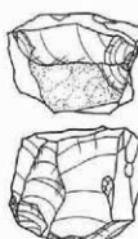
50



52

(1:2) 44-48-51

10cm



(1:3) 45-47

10cm



1 調査前全景
南東より



2 遺跡全景
南東より



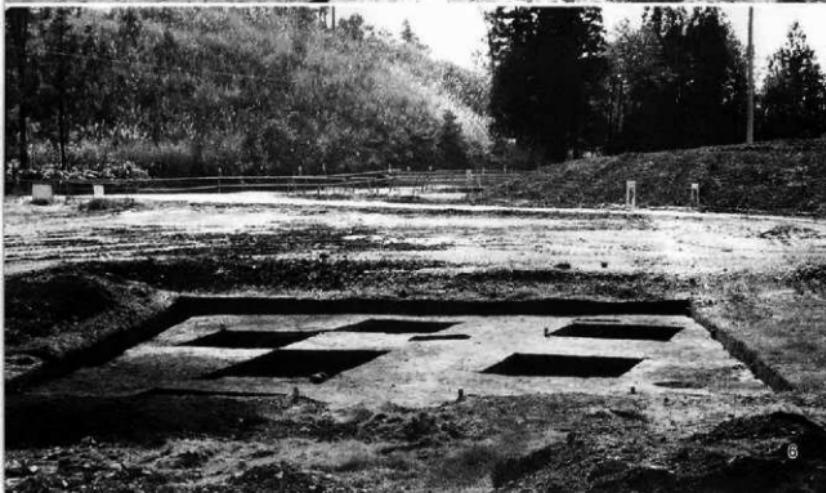
3 遺跡全景
南より



4 12~14列上層完掘
北より



5 12~14列下層完掘
北より



6 平成 7 年度調査区
北東より



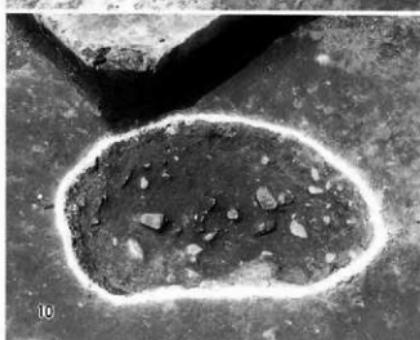
7 12列土層断面
西より



8 SK 1 断面
南より



9 SK 1 完掘
南西より



10 SK 2 完掘
北東より



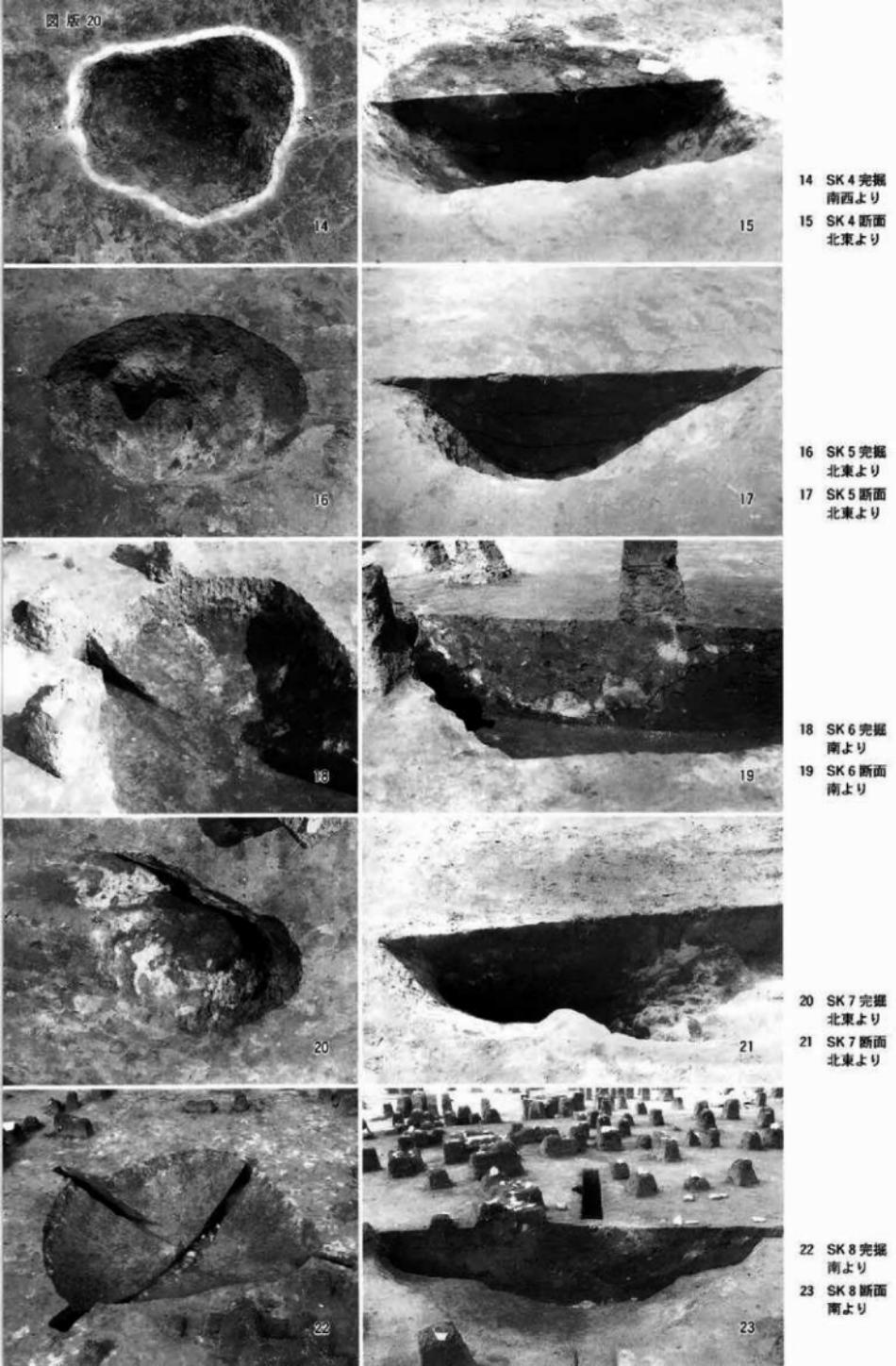
11 SK 2 断面
北東より



12 SK 3 完掘
南西より



13 SK 3 断面
西より

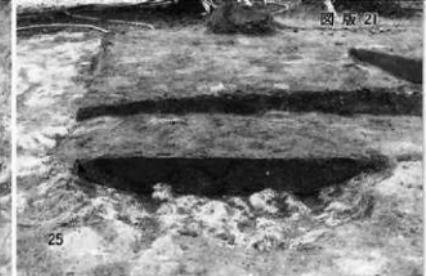
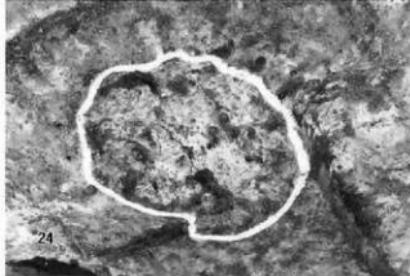


24 SK9完掘

南西より

25 SK9断面

南より



26 SK10完掘

南より

27 SK10断面

南より



28 SK11完掘

北東より

29 SK11断面

南より



30 SK14完掘

西より

31 SK14断面

西より



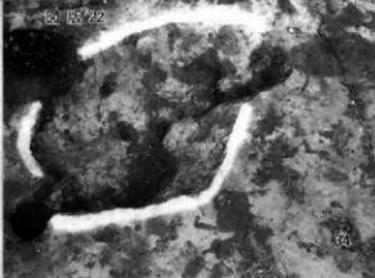
32 SK15完掘

西より

33 SK15断面

西より





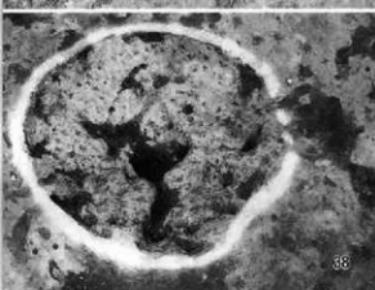
34 SK16完掘
南より

35 SK16断面
南より



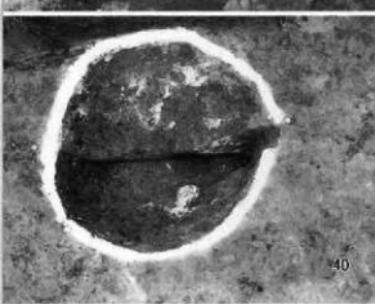
36 SK17完掘
西より

37 SK17断面
東より



38 SK18完掘
南より

39 SK18断面
南より



40 1号ビット完掘
南より

41 1号ビット断面
南西より



42 2号ビット完掘
北より

43 2号ビット断面
北より

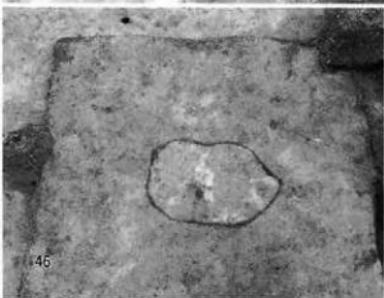
44 3号ピット完掘
北西より



45 3号ピット断面
北東より



46 焼土
南より



47 焼土断面
南より



48 1号集石
北より



49 4号集石
南東より





50

50 4号集石断面
北より



51

51 2号集石
北より



52

52 3号集石
西より



53 土器出土状況(1)
西より

53

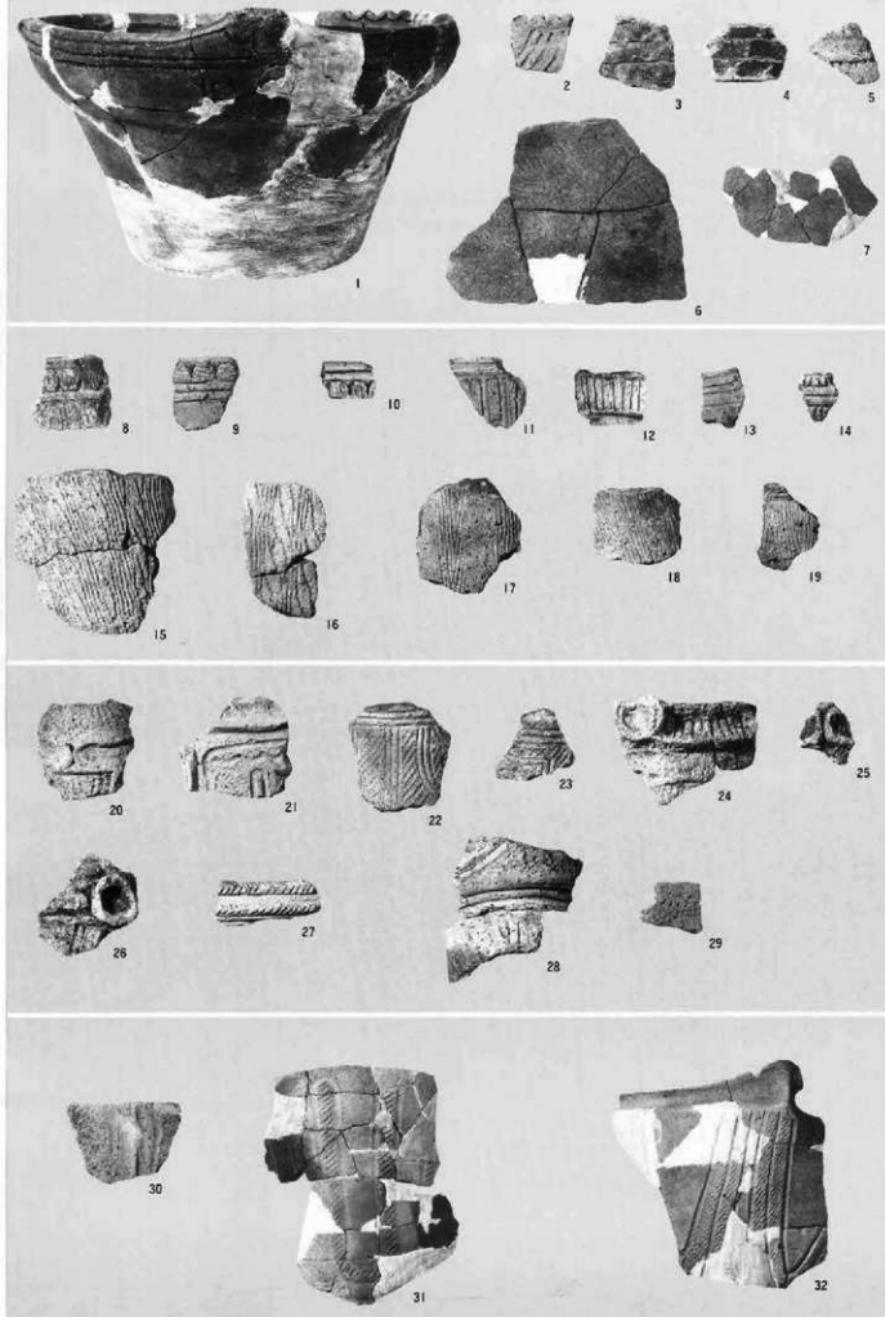


54 土器出土状況(120)
西より

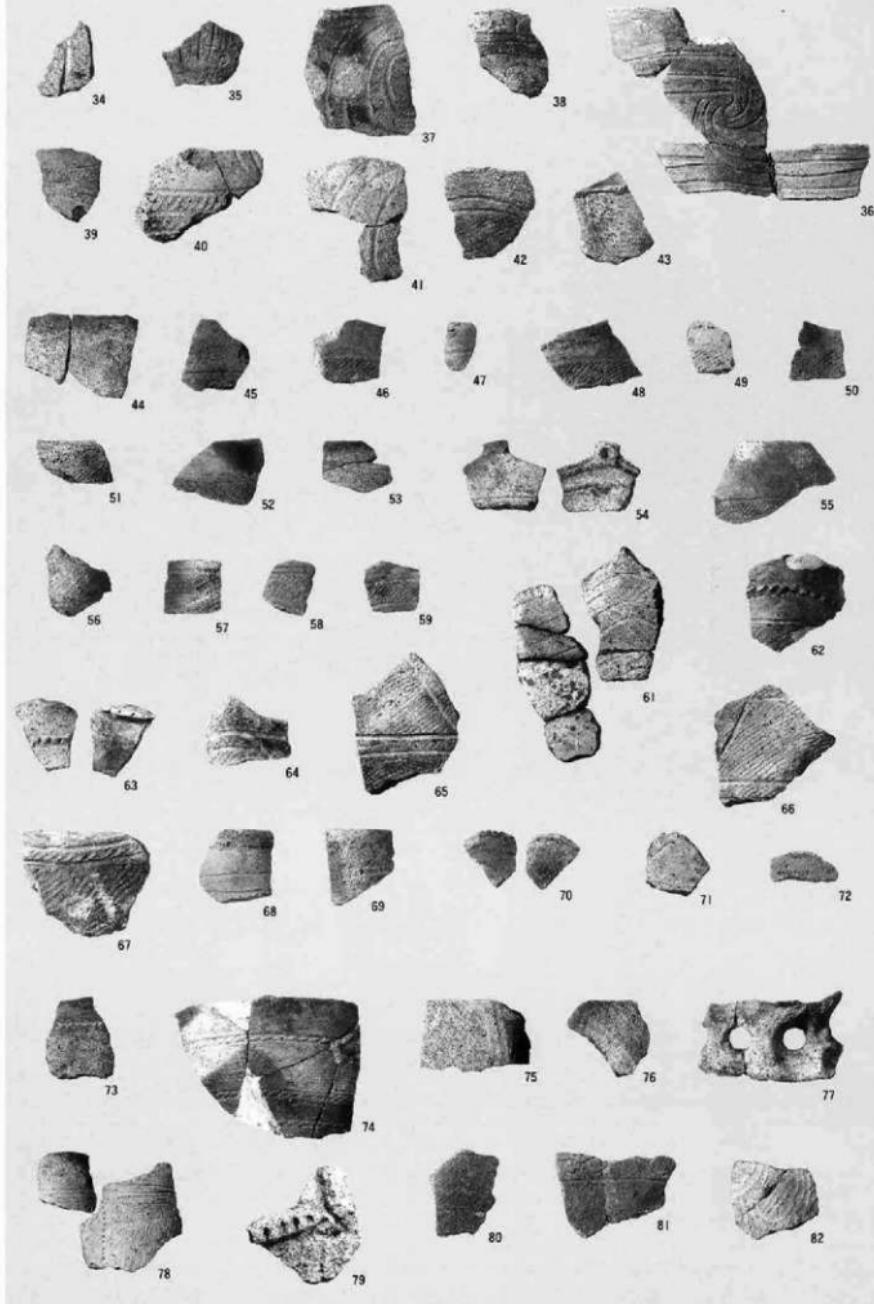
54



55 下層テストピット
金景
西より



土器 2



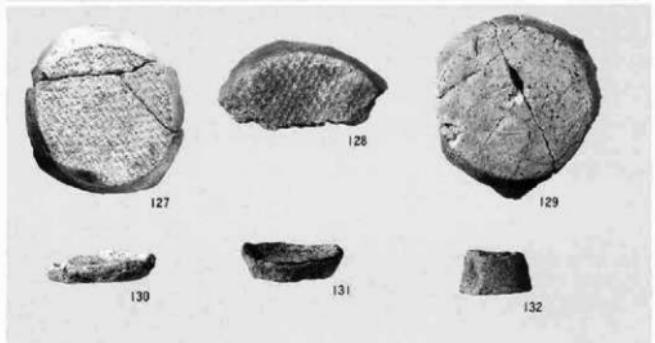
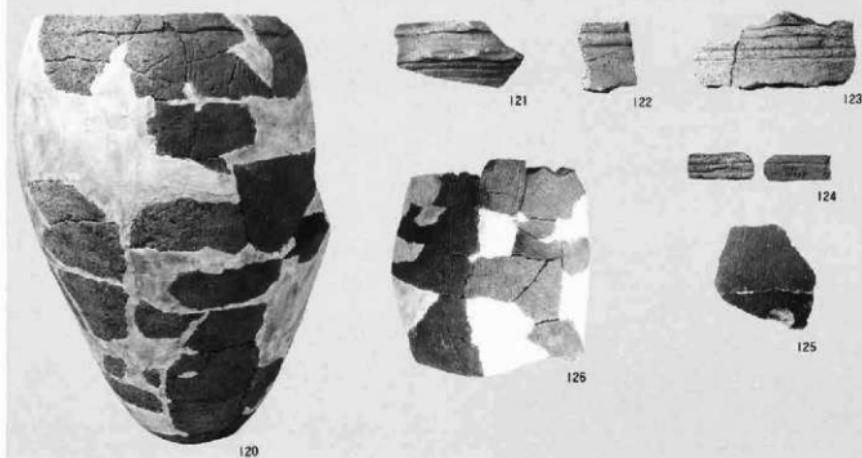
86~90・90
(1 : 5)その他
(1 : 3)

土器 4

土製品

須惠器

錢 貨



120・126

(1 : 5)

121~125

127~132

134

135

(1 : 3)

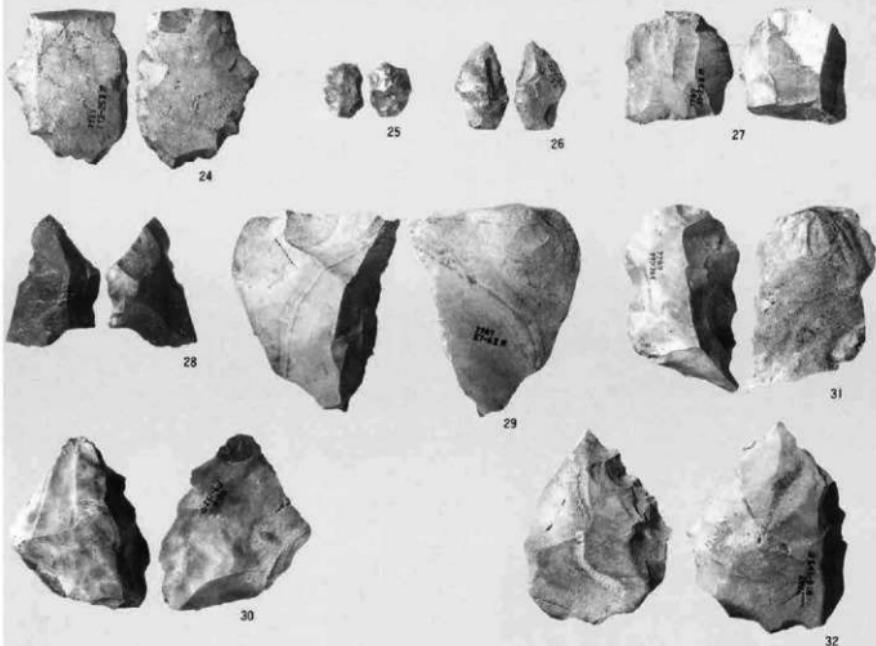
133-136~139

(2 : 3)



石錐 1~10
(3 : 4)石錐
11
(3 : 4)石匙
12・13
(1 : 2)楔形石器
14
(1 : 2)不定形石器
15~23
(1 : 2)

石器 2



不定形石器

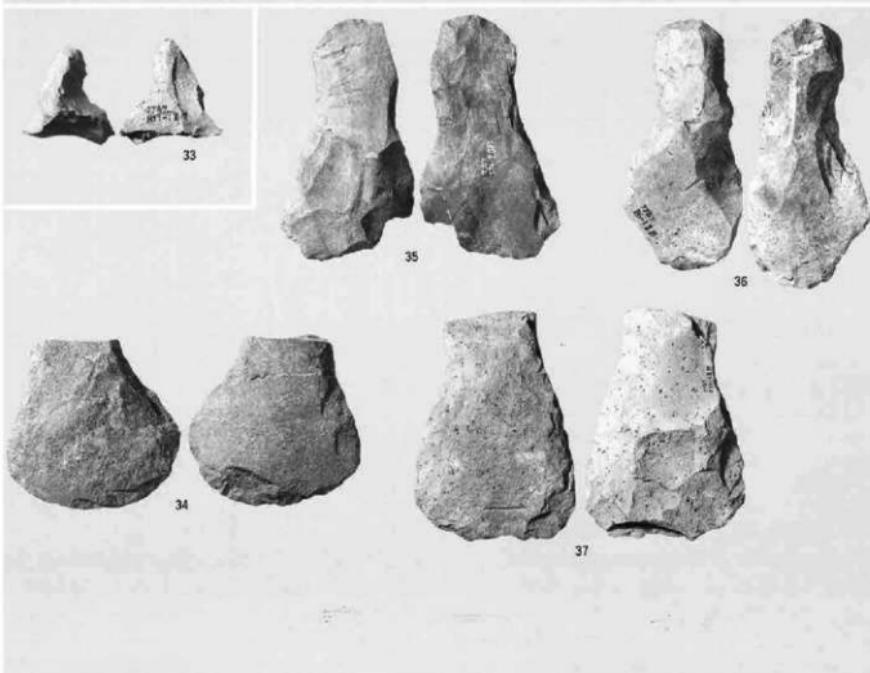
24~32

(1 : 2)

三脚石器

33

(1 : 2)



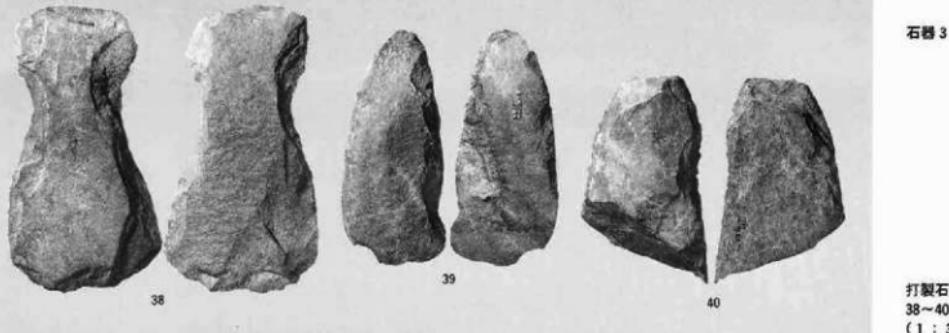
打製石斧

35・36

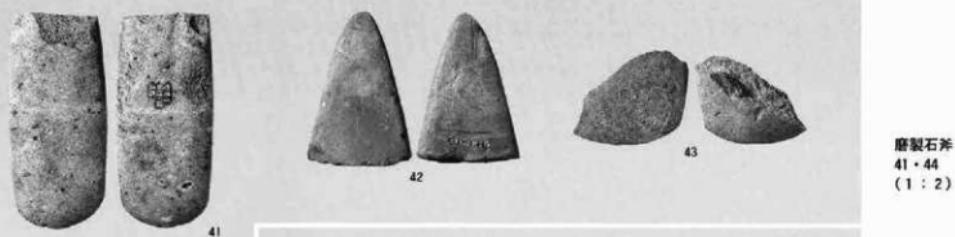
(1 : 2)

34・37

(1 : 3)



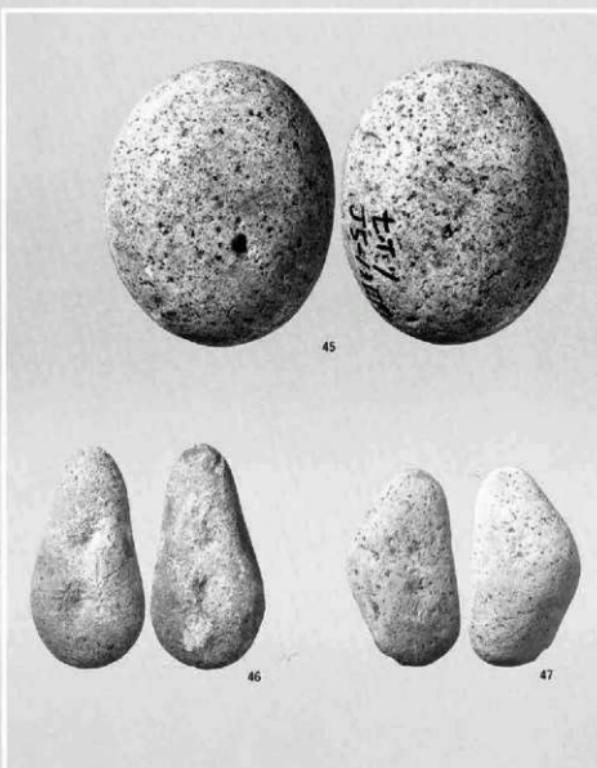
打製石斧
38~40
(1 : 3)



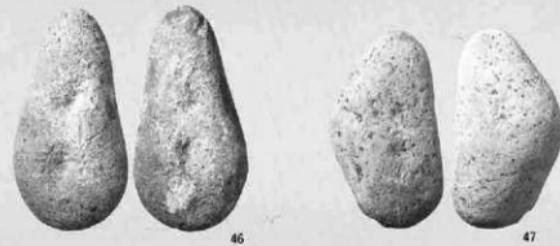
磨製石斧
41~44
(1 : 2)



45



45



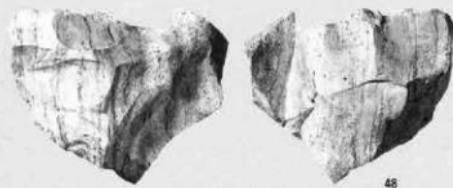
46



47

磨石
45~47
(1 : 3)

石器 4



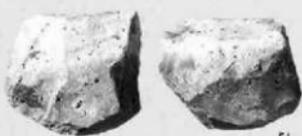
48



49

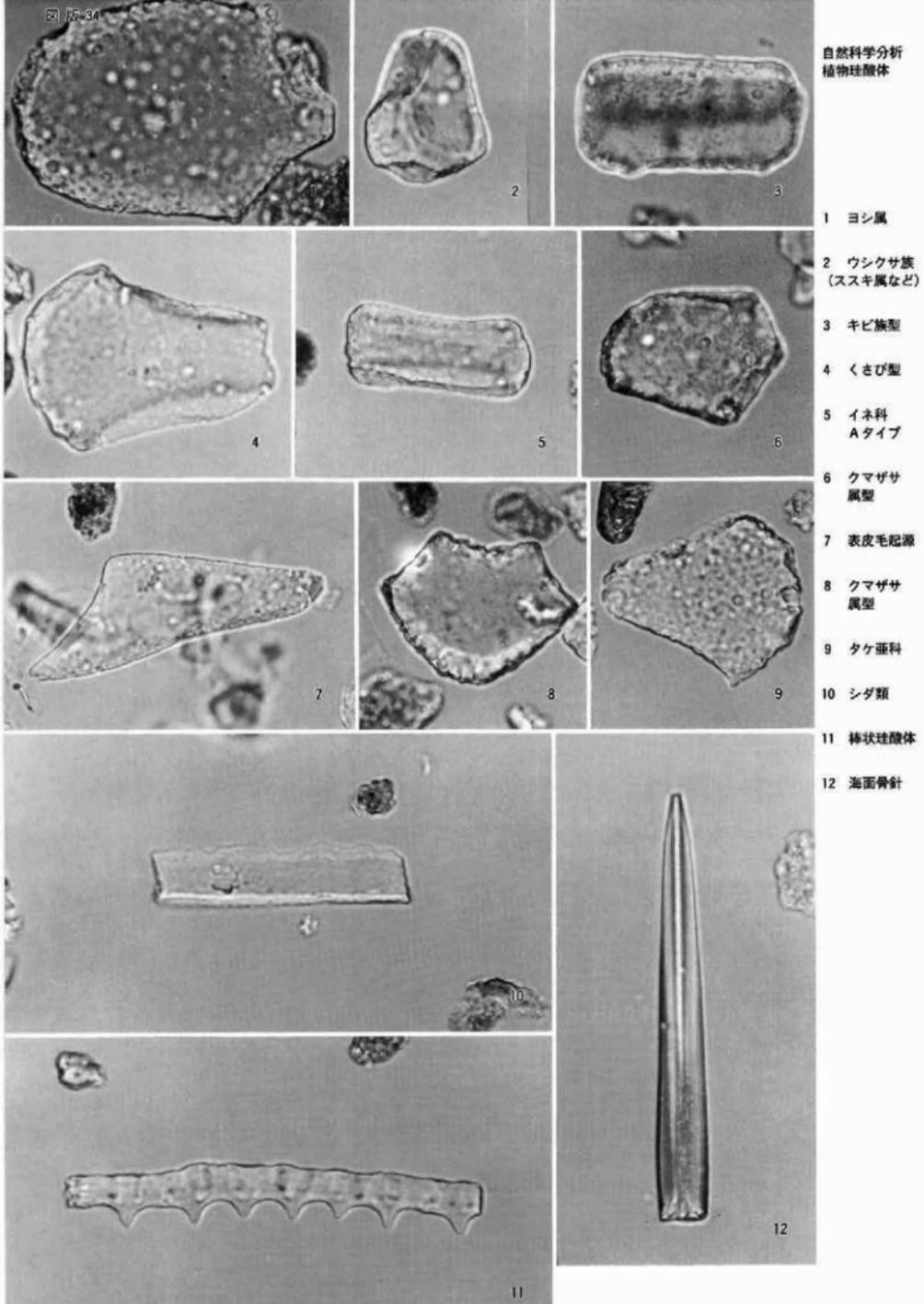


50



51

石核
48~51
(1 : 2)



報告書抄録

書名	七堀道下遺跡							
原書名	磐越自動車道関係発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第77集							
編著者名	飯坂盛泰							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒950 新潟県新潟市一番振通町5923-46 TEL. 025-223-5642							
発行年月日	1996年3月31日							
所以遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
七堀道下遺跡	新潟県東蒲原郡上川村大字九島字七堀道下はか	15-383	40 39分 35秒	37度 29度 13秒	139度	第一次調査 1992.07.21～1992.07.29 1992.11.09～1992.11.11 第二次調査 1994.04.12～1994.10.26 1995.10.30～1995.11.10	7,300m ²	道路（磐越自動車道いわき～新潟線）の建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
七堀道下遺跡	遺物包含地	縄文時代中期～晚期	土坑・集石・焼土	縄文土器・石器（石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧はか）				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第77集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

ななほりみちした
七堀道下遺跡平成8年3月25日印刷
平成8年3月31日発行編集・発行 新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町4-1
電話 025(285)5511財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒950 新潟市一番振通町5923-46
電話 025(223)5642
FAX 025(228)1762印刷・製本 北越印刷株式会社
〒940 長岡市福住1丁目6-27
電話 0258(33)0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第77集 『七堀道下遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	北緯	37度39分35秒	37度38分51秒
抄錄	東経	139度29分13秒	139度28分42秒